

下村観山の新潟旅行(明治42年)について——新出作品《普賢文殊》を起点に

長嶋 圭哉

はじめに

本稿では、新潟県を舞台とする日本近代美術史のトピックスとして、日本画家・下村観山(明治6～昭和5)による明治42年(1909)の新潟旅行を取り上げる。

この年、観山は日本美術院の盟友・木村武山(明治9～昭和17)とともに県内を旅行し、長岡の実業家・井口庄蔵宅に長期滞在して代表作《小倉山》(六曲一双屏風、横浜美術館蔵)を描いた。令和元年度、当館に収蔵された下村観山の新出作品《普賢文殊》(双幅)もまた、かつて長岡の人物が所蔵した作品であり、この旅行の前後に制作された可能性が高い。これら以外にも、多くの観山作品が新潟県人(とくに実業家)によって所蔵され、その契機として、明治42年の観山による来県があったと考えられる。

以下においては、まず《普賢文殊》についての詳しい紹介をおこなう。次に、観山らの来県時の動向を当時の新聞・雑誌等の文献から可能な限り解明し、加えて『観山画集』(大正6年)や観山遺作展(昭和6年)の目録等に記載のある県内所蔵家の人物像・所蔵作品を通して、新潟旅行に関する更なる手がかりを探る。以上から、観山はなぜ本県を訪れたのか、観山は県内実業家たちとどのように交流したのか、また、観山らの新潟旅行はその後何をしたのか等について、考察を試みることにしたい。

1 新出作品《普賢文殊》について

本章では、当館所蔵の下村観山《普賢文殊》について詳述する。

下村観山《普賢文殊》1

- 制作年： 明治42年(1909)頃
素材・技法： 絹本(金襴地)彩色
形状： 軸装(双幅)
画面寸法： 各(縦)134.7×(横)52.3cm
落款： 普賢：画面中央右寄り下に署名
「観山」、朱文方印「観山」
文殊：画面中央下に署名「観山」、
朱文方印「観山」
初出展覧会： 故下村観山遺作展覧会
(東京府美術館、昭和6年2月21日
～3月6日)
収蔵年度・経緯： 令和元年度寄贈(高島博氏旧蔵)

(主題)

釈迦如来の脇侍である二菩薩を双幅に表す。一般に、釈迦三尊は左脇侍(向かって右)に文殊菩薩、右脇侍(向かって左)に普賢菩薩を配する例が多い。しかし本作では、箱書が右から「普賢／文殊」となっている上、本作



図1 下村観山《普賢文殊》明治42年頃 新潟県立近代美術館・万代島美術館蔵

品の図版の初出と思われる『渡辺家所蔵品入札目録』（長岡市常盤楼、昭和8年9月25日、この目録については後述）においても、右に普賢、左に文殊の配置で図版掲載されている。これらの点から、普賢像を右幅、文殊像を左幅とする。ただし、疑問点も残る。普賢は向かって左側に体躯を傾けているが、文殊は正面観であり、また、両尊の画面に対する比率も異なり、両幅を並べた時、左右相称にならない。両幅の落款も、左右対称の位置に配されていない。

右幅の普賢菩薩は、蓮華座を乗せた白象に座し合掌する。四分の三正面観の姿形は、《普賢菩薩像》（平安時代・12世紀中頃、東京国立博物館蔵、国宝）とよく類似している。白象はほぼ正面を向き、鼻先で蓮華を持つ。

左幅の文殊菩薩は、蓮華座を乗せた青獅子に座し、右手に智慧を象徴する三鈷剣、左手に経典を乗せた蓮華を持つ。頭上に髻を結う姿は《文殊渡海図》（鎌倉時代・13世紀、醍醐寺蔵、国宝）等の作例に倣ったとも考えられる。ただし、醍醐寺本は五髻、本図は八髻である。獅子の顔貌は日本古来の獅子狛犬のそれではなく、現実のライオンに近い。逆立つ鬣の形状は翼のようにも見え、西洋の「有翼の獅子」の図像を意識した可能性もある。観山は、明治36年（1903）渡欧し、イギリス、フランスに滞在後、各地を巡遊しているが、本図特有の表現は、こうした西洋体験の反映とも見ることができる。両菩薩の図像表現に古典研究の跡を窺わせる一方、獅子のリアルな描写においては新機軸を打ち出しており、その両者の兼ね合いが観山芸術の特徴ともいえる。

観山は後に、垂髪・水干姿の稚児文殊が青獅子に乗る《稚児文殊》（大正12年頃、横浜美術館蔵）を描いており、獅子の描写が本作と類似する。緑青や群青で体躯を描き、その上に金泥で毛描きする点が共通している。なお、観山は《獅子図屏風》（大正7年、二曲一双屏風、水野美術館蔵）でも青緑色の獅子を描いている。柏木智雄氏（横浜美術館）からのご教示によれば、観山は、横浜の実業家で茶人、古美術収集家でもあった原富太郎（三溪）の邸宅で三溪所蔵の美術品を折々鑑賞したが、《稚児文殊》は、三溪の『美術品買入覚』の明治42年（1909）の部に記載がある伝藤原信実《稚児文殊騎獅像図》（鎌倉時代、個人蔵）を参照して描かれた可能性が高いという。下村観山画房日記の昭和2年（1927）8月21日の項にも、同作品を三溪邸で鑑賞したことが記録される。観山が岡倉天心の仲介で三溪の知遇を得るのは明治44年（1911）のことであり、三溪による伝信実の入手（明治42年）と観山による《普賢文殊》の制作が時期的に重なるのは偶然と思われる。

なお、観山の同時期の仏教主題の人物像として、《不動》（明治42年頃、ギャラリー一鉄齋堂蔵）、《毘沙門天 弁財天》（明治44年、六曲一双屏風、徳島県立近代美術館蔵）、《観音図》（明治44年頃、滋賀県立美術館蔵）等がある。

（素材・技法）

特筆すべきは、日本画の支持体としては珍しい「金襴」に描いていると推察される点である。本作品の初出展である「故下村観山遺作展覧会」（東京府美術館、昭和6年）の陳列品目録（後述する）には、「金襴地尺八条本対幅」との記載がある。「尺八」（一尺八寸）は約54.5cmで、当館作品の実測幅は52.3cmであり、近似値といえる。外箱の蓋および内箱の身には、それぞれ同じ内容の紙箋^④が貼り付けられ、「乾／第五拾九号／下村観山筆／普賢／文殊／織金地物」と記されているが、この「織金地」は「金襴地」と同義であろう。

目視の限りでも、絵絹に金箔を押した一般的な「絹本金地」とは明らかに異なり、金糸によって織られた「金襴」の織り目が確認できる。本作品は依頼画と考えられ、その依頼主からの特別な注文に応じて、この支持体が選択されたとみるのが自然である。

表現についてみれば、二菩薩の装束の文様や獅子の鬣を細密な描線で表し、白象の体躯や文殊菩薩の光背に、金襴の地が透けるような薄い彩色で暈しを施すなど、画技の高さが際立つ。おそらくは画家にとって不慣れた素材であった金襴地を用いながら、このような細密な表現が実現されたことには驚くほかない。

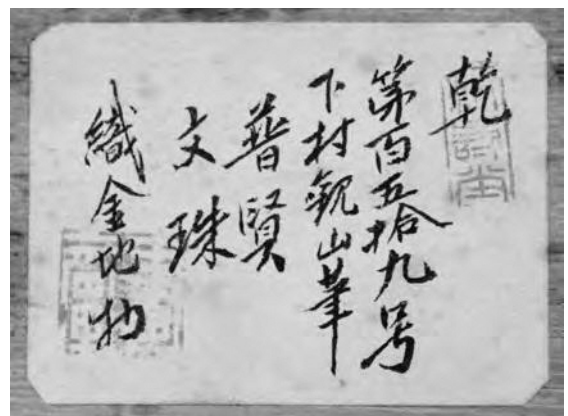


図2 《普賢文殊》内箱の身に貼られた紙箋

(旧蔵者と初出展)

本作品は、長岡で活躍した実業家、高鳥博(明治20～昭和48)の旧蔵品である。

高鳥博は、西頸城郡平村(現在の糸魚川市)に高鳥順作(明治元～昭和33)の長男として生まれた。父順作は土木建築請負業「高鳥組」を創業して新潟県下の公共事業を受注し、衆議院議員(立憲民政党)・貴族院議員を務めた人物である。大正4年(1915)3月順作が衆議院議員に当選すると、博は高鳥組を弟に継承させ、自身は長岡へ移って別に高鳥組を興した。大正8年(大正12年との資料もある)合資会社に変更し、事業の主力を鉄道に向けた。

高鳥博は、能生銀行株式会社取締役、長岡合同運送株式会社取締役・監査役、高鳥組合資会社代表者を務め、長岡市市議員、新潟県会議員、長岡市参事会員、長岡商工会議所議員等の公職にも就いた。また、昭和10年(1935)、本格的な競泳プールを備えた「長岡競泳池」(長岡市中島)を開場させ、通称「高鳥プール」と呼ばれた。昭和17年(1942)の企業整備令を受け、高鳥組は解散した¹。

ただし、《普賢文殊》の最初の所蔵者は高鳥ではなかったとみられる。作品の外箱の蓋には、本作品の初出展と考えられる「故下村観山遺作展覧会」の出品票^{図3}が貼り付けられ、ここに所蔵者として「渡辺清次郎殿」の文字がある。箱内には、展示に使用されたと思われる題箋^{図4}も残され、「渡辺清次郎君 長岡」と記されている。

昭和5年(1930)5月10日の観山没後、以下の通り、遺作展が少なくとも3回開催された。《普賢文殊》は、このうち、東京府美術館での展覧会のみに出展された。



図3 《普賢文殊》外箱の蓋に貼られた出品票

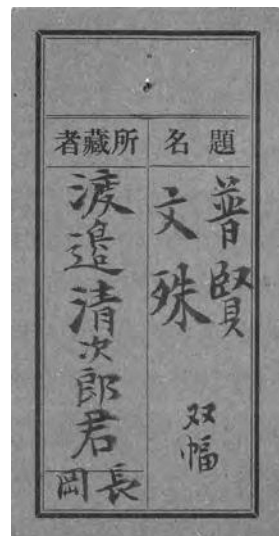


図4 《普賢文殊》箱内の題箋

展覧会名	会期	会場	出品目録
故下村観山遺作展覧会	昭和6年 2月21日～3月6日	東京府美術館	『故下村観山遺作展覧会陳列品目録』 (日本美術院、昭和6年)
下村観山遺作展覧会	昭和11年 5月10日～5月24日	恩賜京都博物館	『下村観山遺作展覧会目録』 (恩賜京都博物館、昭和11年)
観山遺作展観	昭和11年 6月1日～6月8日	東京美術学校陳列館	『観山遺作展観目録 附略伝』 (東京美術学校、昭和11年)

《普賢文殊》は『故下村観山遺作展覧会陳列品目録』の「第六室 五浦時代(三)」の冒頭に記載され、「長岡 渡辺清次郎君蔵」となっている。

前述の箱蓋の出品票には「五浦」との朱書があるが、これは遺作展の章立て、つまり観山の「五浦時代」に描かれた作品であることを意味すると思われる。観山は、明治39年(1906)、日本美術院の経営悪化に伴い、横山大観・菱田春草・木村武山とともに家族を伴い、茨城県五浦に移住した。明治45年(1912)、家族を五浦に残し上京、本郷区田町の親戚宅に仮寓ののち、下谷区上根岸の仮宅に入り、家族を呼び寄せた上、自身は横浜本牧の仮宅に移った。さらに翌大正2年(1913)、同地の新邸に転居した。つまり、厳密には明治39～45年(1906～12)の間が観山の「五浦時代」ということになるが、同遺作展では「明治四十年(三十五歳)―大正三年(四十二歳)」の間を「五浦時代」と位置づけている。また、出品票の展覧会名の前に記された「日本美術院内」の文字は、会場名ではなく、遺作展が日本美術院

¹ 高鳥博の略歴については以下を参照した。人事興信所編『人事興信録』8版(昭和3年)、9版(昭和6年)、10版(昭和9年)、11版(昭和12年)、12版(昭和15年)、13版(昭和16年)、14版(昭和18年)、15版(昭和23年)。津田誠一『土木人物誌』ジャパン・レールウェイ社、昭和8年。坂井新三郎『越佐と名士』越佐と名士刊行会、昭和11年。日本風土民族協会編『越・佐傑人譜 昭和十四年度版』日本風土民族協会、昭和13年。牧田利平編『越佐人物誌』野島出版、昭和47年。内山喜助編『ふるさとの想い出 写真集 明治大正昭和 長岡』国書刊行会、昭和55年。新潟日報事業社出版部編『写真集 ふるさとの百年 長岡』新潟日報事業社、昭和57年。『長岡歴史事典』長岡市、平成16年。100周年誌執筆企画委員会編『長岡商工人 百年の軌跡―不死鳥のまちを支えた商工人名録―』長岡商工会議所、平成23年。小林正『～コラム～ 苦楽と一緒に生きてきて』株式会社建設ジャーナル社ウェブサイト、<http://kensetsujournal.com/column/column.html>(令和5年12月1日閲覧)。

によって主催され、日本美術院試作展と連続した会場で開催されたことを意味するのであろう²。

なお、遺作展開催を機に、下村英時編『観山遺作集 乾・坤』(下村仙、昭和6年)が刊行されたが、ここに《普賢文殊》の掲載はない。

《普賢文殊》の所蔵者として記される渡辺清次郎なる人物については、調査の結果、長岡の実業家、渡辺六松(弘化2～昭和4)の長男であることが判明した。昭和6年の『故下村観山遺作展覧会陳列品目録』および『観山遺作集 乾・坤』において渡辺清次郎の所蔵となっている《美人と舍利之図(美人と舍利)》(現在は豊田市美術館蔵)は、井上徳三編『観山画集』(東京美術奨励会、大正6年)にも図版掲載され、ここでは所蔵者名を「(越後)渡辺六松氏蔵」と記している。さらに、坂井雲舟『訪問記』(速報社、明治40年)、坂井新三郎『越佐と名士』(越佐と名士刊行会、昭和11年)その他の文献によって、六松の長男の名が「清次郎」であること、また『越佐と名士』によって、渡辺六松は「故下村観山遺作展覧会」の2年前の昭和4年(1929)に没し、清次郎が家督を相続したことも確認できた³。《普賢文殊》が渡辺六松の所蔵になることを明示した資料は未見だが、以上のような状況証拠から、六松の旧蔵品と判断して差し支えないものと考えられる。

(制作年)

作品や箱書に年記はなく、前述のとおり、『故下村観山遺作展覧会陳列品目録』では「五浦時代」(明治40～大正3年)に区分されるものの、より具体的な制作年代を示す文献は見当たらない。



図5 《普賢文殊》署名部分



観山の署名の変遷を辿ると、明治40年(1907)の《木の間の秋》(二曲一双屏風、第1回文展、東京国立近代美術館蔵)では楷書に近い書体を示す一方、同年頃の《荒磯》では曲線的な崩し字となり、明治41年(1908)の《風》(東京藝術大学蔵)、明治42年(1909)に長岡の地で描かれた《小倉山》(六曲一双屏風、国画玉成会研究会展覧会、横浜美術館蔵)、また同じく明治42年の作で、長岡の渡辺六松が所蔵した《美人と舍利之図(美人と舍利)》(双幅、豊田市美術館蔵)等では「観」の最後の画が震える特徴を示している。《普賢文殊》の署名[図5]は、これらに最も近い。なお、明治40～42年作品の「震え」に似たものは、明治44年(1911)の《朝帰り之図(雪の朝帰り)》(第11回巽画会展、三溪園蔵)や同年の《静清》等にも見られるが、「観」の全般的な崩し方や「山」の2画目が鋭角に折れ曲がる特徴が、《小倉山》等の署名とは異なっている。一方、明治43年(1910)の《魔障》(第4回文展、東京国立博物館蔵)や44年の《唐茄子畑》(六曲一双屏風、第11回巽画会展、東京国立近代美術館蔵)では、「観」の最後の画が殆ど震えない。このように、明治43年以降は再び書体に変化していく。

こうした書体の変遷と、《普賢文殊》が《小倉山》《美人と舍利之図(美人と舍利)》と同様に長岡の人物によって所蔵されていた事実を考え合わせれば、本作品は、明治42年の新潟旅行中か、その前後に描かれた可能性が高い、ということになる。

(表装の葵紋について)

本作品の掛幅の表装は、一文字と中廻

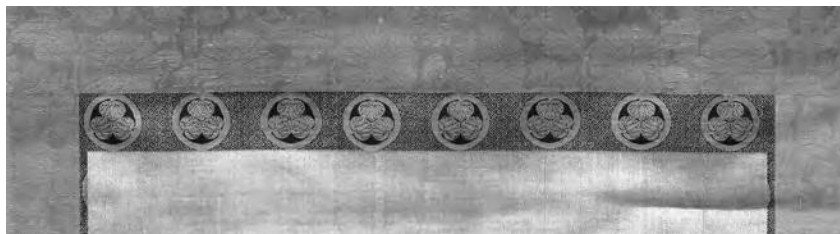


図6 《普賢文殊》右幅表装の一文字部分

² 『日本美術年鑑 一九三二(第六年版)』(朝日新聞社、昭和6年、45頁)には「日本美術院主催で同試作展と連続し府美術館に開催。著名なる傑作の外模写スケッチの類を併せ陳列四百余点」と記されている。

³ 坂井雲舟『訪問記』(速報社、明治40年)の「三七 長岡市 渡辺六松君」の項(113～116頁)には「息清次郎氏、亦此父の子也、太だ勤儉家にして苟も冗費せず、口を開けば経済財事を語る、小は市中の相場より、大は外国貿易の状況に及ぶ、品性亦厳、坐談に長じて交際に妙、実に此父にして此子ありと云ふべし、大清の将来益す祝福すべき也、清次郎君は早稲田大学経済科の出身」とある。坂井新三郎『越佐と名士』(越佐と名士刊行会、昭和11年)の「故 渡辺六松」の項(529～530頁)には「昭和四年十月二日長逝、長男清次郎氏が家督を相続した。【家庭】夫人こう子さん(安政六、三生)、長男清治(ママ)郎氏(明治一一生)(後略)」とある。

しが本紙の周囲を廻り、天地が中廻しの上下に付く形式で、一文字[6]と風帯の裂には、「丸に三つ葉葵」の家紋があしらわれる。この表具は『渡辺家所蔵品入札目録』(長岡市常盤楼、昭和8年9月25日)[7]にも見えており、当初のものと考えられるが、葵紋の所以については未詳である。観山は紀州徳川家に仕える能楽師の家に生まれたが、下村家の家紋は葵紋とは異なる上、出自との関係で表装に葵紋を用いたとは考えにくい。本作品は仏画であるため、旧蔵者の信仰(菩提寺等)と関連する可能性があるのかもしれない。

2 観山の新潟旅行(明治42年)、その他の本県との接点について

観山の代表作《小倉山》が制作され、またその前後に《普賢文殊》が制作されたと考えられる、観山による明治42年(1909)の新潟旅行に焦点をあてる。

観山がなぜこの年に来県したかを解き明かすため、それ以前まで時間を廻り、観山と新潟県との接点について辿りなおしておくことにしたい。

明治31年(1898)、観山は東京美術学校騒動により同校を辞職し、日本美術院創立に正員として参加した。その2年後の明治33年(1900)10月12日～10月18日、新潟市の新潟県議会議事堂(現新潟県政記念館、重要文化財)で「日本美術院新潟絵画展覧会」が開催された。この展覧会については、「1900年(明治33)巴里・東京・新潟 近代日本画への模索と展開」展図録(新潟県立近代美術館、平成9年)掲載の横山秀樹「新潟絵画展覧会と日本美術院」(56～59頁)および資料編(97～119頁)に詳しい。日本美術院の地方巡回展の一つとして、新潟県知事を務めた千頭清臣(岡倉天心と同年に東京大学文学部卒業、日本美術院創立時の名誉賛助会員)の後押しを受けて開催されたもので、7回にわたり賛助員を募り、下越を中心とする有力者67名が資金を拠出した。展覧会に先立ち、同年9月8日、新潟市行形亭において天心による講話が行われた。出品数は700点前後におよび、入場者は6,000余名にのぼった。翌34年(1901)8月には新潟市真行寺で第2回展覧会が開催されたと伝えられる。この時、観山が来県した事実は確認できないが、彼は《元禄美人図(三味線図)》(明治32年、二曲一双屏風のうち右隻、石水博物館蔵)、横山大観とともに日月を描き分けた《日蓬菜山図》(明治33年、静岡県立美術館蔵)など17点もの作品を出品している。

その後観山は、明治36年(1903)2月に文部省留学生として渡英し、欧州各地を巡遊する。同年初夏には、岡倉天心が茨城県五浦の土地を購入し、別荘の建築にかかる。観山は38年(1905)12月帰国する。翌39年(1906)5月頃、天心が新潟県赤倉の土地を購入し、山荘を建てる。6月、天心が横山大観・菱田春草を赤倉に招き、日本美術院の赤倉移転を図るが、五浦移転が決定される。11月、大観・春草・観山・武山が一家をあげて茨城県五浦に移住する⁴。以上のような日本美術院の五浦移転に関する動向の後、観山による二度の新潟旅行が行われている。

まず、明治40年(1907)3～5月(『下村観山伝』によれば5月)、観山は木村武山とともに越後・信濃地方を旅行した。新潟県内での足跡は不明だが、観山留学中に親交のあった長野県上高井郡須坂町(現在の須坂市)の素封家牧善七方に長期滞在して作品を制作し、有志の世話により、武山とともに料亭清泉亭で画会(作品頒布会)を催している。次いで明治42年(1909)2～9月、観山は武山とともに越後各地を旅行、長岡の素封家井口庄蔵宅に長期滞在した。



図7 『渡辺家所蔵品入札目録』(長岡市常盤楼、昭和8年9月25日)
画像提供:東京文化財研究所

4 「日本美術院関係資料―五浦時代」日本美術院百年史編集委員会編『日本美術院百年史』3巻下〔資料編〕、財団法人日本美術院、平成4年、128頁。

齋藤隆三『日本美術院史』には、観山・武山が地方旅行を重ねた経緯についての記述がある。以下にかいつまんで引用する。日本美術院が五浦に移転した当初は「全員こぞって意気の盛んなものがあり、いかなる窮乏にもたえて所信に邁進し、目的を貫徹しようとしたものであったが、「刺戟もなく歡樂も乏しい」遠隔の不便な土地で、彼らが頼りとする天心もボストン美術館勤務のため不在がちとなり、彼らは「寂寥と落莫にたえかねて」、東京や水戸に出たり、2、3週間の旅に出たりするようになった。明治41年(1908)5月、春草が眼病治療のため五浦を去り、同年9月には大観が五浦の住居を火災で失い、東京に帰住した。そして『日本美術院史』は次のように結んでいる。

(前略)かくて春草と大観と相次いで五浦を去り、その後にはただ観山と武山の二人のみが残されたが、これも兩人だけとなりて一層の寂寥にたえかねてか、相携えて信州や越後の旅に上り、長岡などに知をえては半年の長きにわたりてその地に滞在し、その間ついに家を顧みなかったというほどにもなった。要するに移転後三年にして、五浦の美術院は、留守居のもの夫婦が寂然として研究所に美術院の看板だけを守り、その存在の実態はこれを存ぜぬものとなったとするのを実状とする。⁵

つまり、五浦移転後の関係者の離散により、「一層の寂寥」に耐えかねた観山らが頼ったのが、須坂の牧善七であり、長岡の井口庄蔵だった、ということになる。ただし、観山が井口といつ面識を得たかは定かでない。明治33年(1900)の日本美術院新潟絵画展覧会の際、多くの出品作品が売約され、また優等品が寄付金者に対して頒与されたことを考えれば⁶、この機会が観山と県内有力者との関係が築かれる端緒であったことは間違いない。田中日佐夫は「日本美術院が創立された明治三十一年頃、長岡に井口庄蔵という人がいて経済的に相当力をかしていた。」と述べているが⁷、少なくとも日本美術院新潟絵画展覧会の賛助員の中に井口の名は確認できない⁸。後述のように明治8年(1875)あるいは9年(1876)生まれの井口庄蔵は、当時まだ20歳代で、実業家として駆け出しの頃であったと思われる。彼の先代も庄蔵を名乗った可能性があるが⁹、このことについてはさらなる検証が必要である。

さて、観山による明治42年(1909)の新潟旅行に関する先行研究は見当たらず、関連する観山の日記・書簡等の翻刻もない。最も詳しい記述がみられるのは、観山息の下村英時による『下村観山伝』(大日本絵画、昭和56年)であろう。以下に引用する。

明治四十二年(一九〇九)三十七歳、この年二月より九月まで木村武山と共に新津、金津、三条等越後各地に遊び、後、長岡の素封家井口庄蔵氏宅に長期滞在す。この滞在中の作と思われるものに、「漁夫」、「はたる」(衝立表裏両面図)、「十牛図」(色紙帖)、「三聖図」、「いそっぽ物語」(紙本金地、二曲屏風一雙)等がある。この行には途中から観山の兄清時もこれに加わった(『美術新報』第八巻第十二号)。(中略)

しかし同時開催の国画玉成会研究会展覧会には長岡滞在中制作の「小倉山」(六曲金屏風一雙、紙本金地着色、各隻縦五尺一寸七分、幅十一尺、長岡、井口庄蔵氏蔵)を出品す。(中略)

尚、後年観山はこの屏風について左記の追憶談を語っている。

又玉成会の小展覧会に出した「小倉山」の屏風は、越後滞在中、旅先きで三月か、つて描き上げて出品したのですが、ソレを岡倉先生は御覧になつて、旅先で三月が、りて一つものを描くのは結構な事だと仰しやつて見てくれましたが、(中略)(齋藤隆三『日本美術院史』)¹⁰

5 「潮風荒し五浦の六年 隠然重きをなした実力の存在」齋藤隆三『日本美術院史』中央公論美術出版、昭和49年、128～130頁。

6 横山秀樹「新潟絵画展覧会と日本美術院」(『1900年(明治33)巴里・東京・新潟 近代日本画への模索と展開』展図録、新潟県立近代美術館、平成9年、59頁)では『越佐新聞』明治33年10月20日付の記事が紹介されている。「絵画の出品数は大凡七百点此内売買約定済の分高金凡そ六百余円」、「寄付金者へ頒与するため東京美術院主(ママ)岡倉文学士の審査したる出品画中の優等品は甲種二十六点、乙種三十八点、丙種十六点」であり、甲種26点には観山の《蓬萊》が含まれる。横山は「新潟においてはこの展覧会を契機に、大観・春草は新潟を中心に、観山は長岡に、武山は新津、広業は新潟・三条にそれぞれ後援者を得ることができた。」と述べている。

7 田中日佐夫『美術品移動史—近代日本のコレクターたち—』日本経済新聞社、昭和56年、418頁。

8 「新潟絵画展覧会賛助会員名簿(東北日報)」(『1900年(明治33)巴里・東京・新潟 近代日本画への模索と展開』展図録、前掲註(6)114頁)。

9 人事興信所編『人事興信録』5版(大正7年、い25頁)によれば庄蔵の父の名は井口利兵衛であるが、ここに彼が庄蔵を名乗ったとの記述はない。しかし、今泉省三『長岡の歴史』5巻(野島出版、昭和47年、49頁)には「明治十三年四月のこと、北魚沼郡小千谷町に山本比呂伎・五十嵐麗景・井口庄蔵・小島嘉兵衛らによって保進社が設立された」との記述があり、明治13年(1880)時点で井口庄蔵なる人物の活動が確認できる。また、新潟県史研究会編『新潟県百年史 下巻』(野島出版、昭和44年、219頁)には「井口庄蔵の子銀(ママ)次郎(後三代井口庄蔵)」との記述がある。

10 「(五)文展時代(五浦時代)」下村英時『下村観山伝』大日本絵画、昭和56年、139～143頁。



図8 下村観山《小倉山》明治42年 絹本彩色 六曲一双屏風 各157.0×333.5cm 横浜美術館蔵

この記事からは、①明治42年2～9月の8か月間、木村武山と共に新潟県内に滞在したこと、②訪問地は、少なくとも新津、金津、三条、長岡であること、③そのうちの長期間は長岡・井口庄蔵宅に滞在し、同地で3か月間をかけて《小倉山》を完成させたこと、が読み取れる。

ここで《小倉山》^{【図8】}の来歴について付言しておけば、本作品が出品された国画玉成会研究会展覧会は、明治42年(1909)10月6日～11日、上野不忍池勸業協会で開催された。その後、戦後期にいたるまで、長らく井口家が所蔵し¹¹、東京帝室博物館、戦後は東京国立博物館に寄託された。『国画』1巻4号(昭和16年12月、53頁)には、同館表慶館における同年10～11月の陳列として、「下村観山筆小倉山秋色図屏風一双(井口庄蔵氏)」の記載がある。現在所蔵する横浜美術館の所蔵品目録によると、《小倉山》には「87-JP-012」の収蔵品番号が付され、同館によって昭和62年度(1987)に購入された¹²。なお、本作品は紙本墨画による大下絵も残される(東京藝術大学蔵、昭和29年度購入)。

さて、今回、この新潟旅行での観山らの足跡を追うべく、当時の新聞・美術雑誌その他の文献にあたったところ¹³、その概要を明らかにするには程遠いものの、旅の状況を垣間見せるいくつかの資料が見つかった。それらを以下に紹介していく。

最初に挙げるのは、小野強(天口)編『閻魔言』(明治44年)^{【図9】}である。巻頭の「著者曰く」(9頁)に「『閻魔言』は越佐新報の依頼に依り、長岡及長岡に縁故ある人々に対し、少々御世辞と愛嬌とを振り撒きたる漫言に過ぎず(後略)」とあり、新聞に連載された、長岡にかかわりのある著名人を揶揄するような「漫言」を単行本にまとめたものと考えられる。ここに観山・武山に関する記事がある。全文を引用する(126～128頁、傍線は稿者)。



図9 小野強(天口)編『閻魔言』(明治44年)表紙

画家 下村観山 木村武山(四十二年四月)

面白い連中が遣つて来たなお前達今何処に居る、玉蔵院の井口にかい彼処の妻君は元気がいゝから居心地がよからう、主人が口が悪くて困る、瘦せてる癖に何処から彼の口が出るだらうと、そりやお前舅の表町の老人が仕込むんだから無理はないよ、それから又肥つてるもの許り口が悪るいとは限りやしないサ、今まで俺の処へ来たものは金の欲さうな俗物が多くて面白くなかつたが、欲気の薄いお前達が来たから愉快で堪らない、聞けば観山などは三菱や横浜の原から年々少ながらん手当を受けてるさうだが、それでも金は溜らんそうだな、ナール程、前途一ケ年位の生活費丈け残して其他は皆な遣つて仕舞ふと、そりや豪気だ、イヤサ感心だ、

11 猪本爾六「歴史の余滴 其の六：下村観山と長岡の人々」『マイ・スキップ』178号、平成27年11月。

12 『横浜美術館所蔵品目録Ⅰ』横浜美術館、平成元年、27頁。

13 調査を行った新聞・雑誌は以下のとおり。『新潟新聞』明治42年2月1日～9月30日付、『新潟東北日報』明治42年1月1日～9月30日付、『美術新報』7巻17号(明治41年11月20日)～9巻4号(明治43年2月1日)、『日本美術』119号(明治42年1月)～130号(同年12月)、『絵画叢誌』261号(明治42年1月)～272号(同年12月)、『研精画誌』35号(明治41年11月)～41号(明治43年1月)、『美術之日本』1巻1号(明治42年5月)～2巻1号(明治43年1月)。

如何に金を嫌ひの芸術家でも、寒けりや感冒もひくし腹が空けば目も凹む、明日のお米が無い様じや入心の作も出来まいから喃、武山、お前も矢ツ張り左様だろう、越乃雲(ママ)を二十円買込んで、鉄道小荷物で東京へ持つて返つた処が、皆んな粉に成つて土産として配られもせず、已むを得ず匙で掬つて嘗めたてじやないか、此辺の遣り口から考へると、蓋し観山と伯仲の間に存る代物だぜ、如何だ、深山幽谷なんて画題よりは越乃雪匙嘗の方が新奇の好画題じやないか、俺も一つ揮毫を頼まうかな、俺のは肖像だぜ、エ、肖像は御免蒙ると、マ、左様いふな、武山には唐津屋のみい、観山には三国屋のみねを遣つて貰はう是れなら不服はあるまい如何だ、揮毫料処ではあるまい、一人前五円ヅ、俺の処へよこす気はないか、モツト沢山出して仕舞ましたと、そうか夫れじや俺は要らないからせめて其代り若満都の女将を大切にしろ、粗相にしちや済まないが、何か札に画で遣つたかい、ム、そうか山と山の間に二匹の猫が小判を覗つてると一羽の鶴が頻りに周旋して居る図だと、可笑な図だなア、何んといふ画題だい、『猫唄ひ山笑う』だ、と猫唄ひとは振つてるね、併し俺にはニヤンだか解らないや。

この記事に関しては、①日付が「(明治)四十二年四月」になっていること、②当時観山らが「玉蔵院」(長岡市玉蔵院町)の「井口」(井口庄蔵邸)に滞在したらしいこと、に留意しておきたい。『下村観山伝』の記述からは、新潟各地を遊歴の後、期間の後半期に井口邸に滞在したように思われたが、実際には、4月の時点から井口邸を拠点としていたことが窺われるのである。

続いては、『新潟新聞』明治42年5月15日付5面である(傍線は稿者)。

◎赤城画会の開催 県下丹青界の名手として知らる、浅野赤城氏の為めに其知友諸氏發起となり明十六日午前十時より西堀八宗現寺に画会を催す由なるが入会者は入会当時二円を納め残額は送画の上とし申込は前記の日時限り東堀十浅井惣十郎氏、本町七館信吾氏、同十一伏見岩蔵氏、西堀六長善寺へ宛て申込まるべく絹本豎幅は金十円、七円、五円に分ち屏風は七十円より廿円迄なりといふ尚ほ当日余興として玉章、観山、広業、華村、玉堂、半古、丹陵、頼章等諸名家の揮毫せる絹本尺五尺二及び半切を陳列し抽籤を以て会員に頒つ由なるが下村観山、木村武山の両氏は多分当日繰合せ出席揮毫するに至るべしといふ

浅野赤城(慶応4～昭和12)は蒲原郡中野中村(現在の長岡市)の出身で、三条町の埴山雲涯に学び、上京して川端玉章、京都に出て竹内栖鳳に師事したが、難病のため帰郷し多数の作品を残した¹⁴。この記事では、観山・武山がどこから出席する予定なのかは読み取れないが、長岡でなく、新潟市近辺に滞在中だったのだろうか。『新潟東北日報』5月16日付3面にも、ほぼ同内容の予告記事が掲載されたが、さらに同紙18日付3面には、以下のような事後記事が掲載されている。ここに観山・武山への言及はなく、結局のところ、彼らの出席揮毫はなかった可能性が高い。

◎赤城画会 浅野赤城氏画会は十六日午前十時より西堀宗現寺に開く、入会者二百余名、当日の出 席者百余名にして発起者総代浅井惣十郎氏開会の辞を述べ午餐の後、寄贈画玉章、観山其他当代名家の揮毫にかゝる数十幅の抽籤あり服部五老、広瀬研堂、片桐文畝、古川水邨、内田春竹、浅野赤城六氏の席上揮毫あり盛会なりし

次は、『東京美術学校校友会月報』7巻10号(明治42年7月、214頁)の「卒業生動静」欄である。引用箇所の前には主として5、6月の他の卒業生の動静が記されており、同時点の情報ということになる(傍線は稿者)。

○下村観山氏 同氏は数月来、筆を載せて越後地方に漫遊せられ、頻りに揮毫せられ居るといふ。

つづいては8月の記事である。『新潟新聞』明治42年8月27日付2面には、以下の記事が掲載される(傍線は稿者)。

14 荒木常能編『越佐書画名鑑 第二版』新潟県美術商組合、平成14年、92頁。

◎武石弘三郎氏歓迎会 同氏は武石貞松氏の令弟にして東京美術学校塑像科加設第一回の卒業にして其後直に歐洲に遊学八年の研鑽を経て本月十一日無事郷里南蒲原郡中之嶋村に帰省せられたるが村内の有志相企て去る二十一日今町柳亭に於て歓迎会を開きたり会するもの七十余名偶友人下村觀山氏も亦長岡より来会せり座定るや発企者総代大竹淑友氏の挨拶あり次に主賓立て遊学の経歴及歌(ママ)洲美術海(ママ)の趨勢等を演述せられ主客十二分の歡を尽して退散せり

武石弘三郎(明治10~昭和38)は、蒲原郡中之嶋村(現在の長岡市)に生まれ、東京美術学校で彫刻を学んだ。ベルギーに留学し、帰国後は実業家・政治家・軍人などの肖像彫刻を数多く手掛けた¹⁵。觀山とは留学中に知り合ったと考えられ、その縁での来会となったのだろう。この記事からは、8月時点で觀山が長岡にいたことが読み取れる。『新潟東北日報』8月25日付5面にも同歓迎会の記事が掲載されるが、觀山の来会への言及はない。

さらに、以下の2つの雑誌記事から、觀山は遅くとも7月以降、長岡に滞在し、そこに兄の清時(豊山)¹⁶が訪問したこと、また觀山は9月初旬に帰京(東京経由で五浦に戻る)予定であることが読み取れる(傍線は稿者)。

○下村豊山氏 七月中より令弟觀山氏の滞留中なる越後長岡に赴き居りしが此程帰京して同地紳士の依頼に依り白衣観音と釈迦座像を彫刻中なりと、尚下村觀山氏は八月中は上記越後長岡に滞在し九月初旬帰京の都合なりと云ふ

『美術界彙報』『美術之日本』1巻5号、明治42年9月1日、30頁

●下村豊山氏令弟觀山氏と越後長岡に赴きしが此程帰京し同地紳士の依頼に依り白衣観音と釈迦座像を彫刻中なり。

『消息』『美術新報』8巻12号、明治42年9月5日、7頁

今回探すことができた関連記事は以上である。当時、長岡では複数の新聞が刊行されていたが¹⁷、公立図書館等への収蔵がないため、未見である。これらを閲覧する機会が得られれば、新潟旅行についてのさらなる情報が得られるに違いない。

以上をまとめれば、次のようになる。県内の催しへの参加が地元紙で報じられるなど、觀山らの動静は世間の関心を呼んでいた。明治42年4月、7月、8月時点では長岡におり、9月初旬には旅を終えたと考えられる。觀山の《小倉山》は同年10月6日開幕の国画玉成会研究会展覧会に出品されており、旅行終盤の3か月はその制作に費やされたのではなかろうか。つまり、6月頃には制作に着手し、8月末か、9月初旬には《小倉山》を完成させたことになるだろう。なお、長岡在住の郷土史家、猪本爾六氏への聞き取り調査では、觀山は井口庄蔵の邸宅ではなく、市内の料亭で《小倉山》を制作したとの情報も得られた。

その一方、『下村觀山伝』に記される新津・金津・三条での足跡は、今回参照した文献からは裏付けられなかった。4月時点で既に長岡の井口邸に落ち着いていたのであれば、それ以前の短期間に各地を巡ったということか。あるいは、長岡の井口邸を拠点としながら、新津・金津・三条に足を延ばしたということかも知れない。彼らの訪問地は、いずれも現在の信越線の沿線にあり、明治期に開業した鉄道が彼らの主な交通手段だったと考えられる。なお、北越鉄道長岡停車場は明治31年(1898)、長岡城本丸跡に開業している。同40年(1907)北越鉄道は国有化され、同42年(1909)10月信越線の名称となっており、觀山らが来県した当時の長岡停車場は、瓦屋根の初代駅舎であった。

当時の長岡は石油採掘により経済的活況を呈しており、明治26年(1893)に創業した宝田石油会社は日清戦争の好景気で乱立した300余の石油会社・組合の合併・買収を推進し、日本石油(出雲崎)、中野石油(金津)とともに県内三大鉱業とも呼ばれた。同35年

¹⁵ 武石弘三郎については佐々木嘉朗『彫塑家・武石弘三郎ノート』(平吉平、昭和60年)および『ベルギーと日本—光をえがき、命をかたどる』図録(日黒区美術館・高梁市成羽美術館・新潟県立近代美術館、令和5年)に詳しい。

¹⁶ 觀山長兄の下村清時(慶応2~大正11)は能面師を経て彫刻家となり、「豊山」「豊悦」と号した。次兄の時も彫刻家となり、「榮山」と号した。

¹⁷ 明治期に長岡に存在した新聞社は次の通り。越佐新聞社(明治14年『越佐毎日新聞』として創刊、22年『越佐新聞』となる)、長岡日報社(明治35年創刊、明治40年『越佐新聞』と合併して『北越新報』となるが、大正4年ふたたび『長岡日報』を發行)、北越新報社(明治40年『越佐新聞』と『長岡日報』が合併して『北越新報』と改名)、越佐新報社(明治33年『鉱業新報』創刊、35年『北越実業新報』、44年『越佐新報』となる)。新潟日報事業社出版部編『写真集 ふるさとの百年 長岡』(新潟日報事業社、昭和57年、96~97頁)に各新聞社の社屋写真・解説が掲載されている。笠輪勝太郎『風羅会のことその他』(『Penac』2号、長岡ペンクラブ、昭和52年、58頁)では「大正から昭和にかけて長岡市に三つの日刊紙があった。北越新報、越佐新報、長岡日報である。(中略)これら三紙のうち北越新報が一番充実していた。」と記している。

(1902)には長岡城二の丸跡に本社を竣工、同40年(1907)には東山油田の産油量が最高になったが、その後下降線を辿った。観山らが来県した明治末期は、長岡における石油産業が最盛期を少し過ぎた時期にあたり、後述するように、井口庄蔵は石油で財をなした有力者の一人であった。新津や金津もまた石油採掘に沸いた土地であり、彼らは同様に実業家のもとを廻って支援を求めたり、依頼制作に応じたりしたのではないかと想像される。

さて、前掲の『美術之日本』記事によれば、観山は9月初旬に旅から戻る予定であった。これとの兼ね合いで、また、今述べた金津での石油事業とも関連して検討したいのは、昭和11年(1936)の八橋徳次郎「古仏像の破片其の他—仏像三昧銭春莊覚帖より—」という記事である。以下に引用する(傍線は稿者)。

それから、近来仏像蒐集家の雄と為られた越後の石油王、中野忠太郎氏の話が出た。

忠太郎氏の親父さんの寛(ママ)一氏の在世の時であった。木村武山氏と故下村観山氏とが、襖絵を依頼されて越後中蒲原郡金津村の中野邸に一ヶ月余滞在した事があつた。今より三十年前の事である。

中野邸で武山氏も観山氏も、毎日せつせと丹青の筆を運んだ。そして完成されて行く自己が製作の三昧境に浸つた。(中略)

二人が北国の風もない晴れた秋の或る日、製作に疲れた身体を休養する為め、広い庭園を散歩して居た。櫓をかけた油田の見える異国情調のある風景である。(中略)

一ヶ月余の縷骨彫心の揮毫も、その完成を告げて武山、観山両氏が暇乞ひに主人の前に出た時(後略)¹⁸

中野貫一(弘化3～昭和3)は蒲原郡金津村(現在の新潟市秋葉区)で石油採掘事業をおこなった人物である。金津は観山らの明治42年の訪問先の一つであったが、記事に述べられる彼らの襖絵制作は、いったいどの年になされたのだろうか。というのも、文中「秋の或る日」と述べられているが、『美術之日本』記事によれば、明治42年秋には観山は旅行からの帰途に着いているはずである。あるいは、帰る予定を変更し、完成した《小倉山》を上野の国画玉成会研究会展覧会に送った後、金津まで足を延ばして一か月間、中野邸で滞在揮毫したのであろうか。なお、観山は前回(明治40年)の新潟旅行でも木村武山と行動を共にしているが、この年の旅行は春(5月、あるいは3～5月)におこなわれており、八橋徳次郎の記事とは食い違う。

最後に、明治42年以後の観山と本県との接点についても、『下村観山伝』等に基づきながら記しておく。明治45年(1912)春、観山は五浦での生活を終えて上京する。大正2年(1913)2月、岡倉天心が体調悪化のためボストン美術館へ休職願を提出し、翌3月帰国の途に就く。8月16日、天心は静養のため、赤倉山荘に赴くが重態となる。8月31日(8月30日とする資料もある)、大観・観山らが赤倉に到着した後、天心は9月2日に没する。大正3年(1914)7月、観山は大観とともに長岡の井口庄蔵宅を訪れ、帰途、赤倉の天心別荘内に記念碑を建立した。『研精美術』89号(大正3年8月、29頁)の「雑録」には「故岡倉氏の石碑」と題して「横山大観、下村観山両氏は、故岡倉覚三氏の事蹟を伝ふるため、生前氏の最も好める岡(ママ)倉に其碑を建てんと、其場所の撰定のため去月廿三日長岡より高田に到り、二三日滞在上視察し帰京せられたり。」と記されている。また、『絵画清談』2巻8号(大正3年8月、79頁)の「美術界彙報」には、「下村観山、横山大観両氏は去月長岡の井口庄蔵氏方に遊びて幾分の揮毫を為し、帰途赤倉温泉の故岡倉氏別荘に立寄り、同邸内に『岡倉先生終焉之地』と題せる記念碑を立てる運びにしたと。」とある。この記念碑の表面には「天心岡倉先生終焉之地」、背面に「大正三年八月建之／下村観山／木村武山／寺内銀三郎／横山大観」の文字があり、両面とも横山大観の揮毫になる¹⁹。同年9月2日、天心一周忌を期し、新築された日本美術院研究所において再興日本美術院の開院式が挙行された。観山は大正5年(1916)秋にも長岡に遊び、12月上旬帰京している。

以上から、明治40年(1907)、明治42年(1909)、大正2年(1913)、大正3年(1914)、大正5年(1916)の少なくとも5回にわたり、観山は

¹⁸ 八橋徳次郎「古仏像の破片其の他—仏像三昧銭春莊覚帖より—」『漆と工芸』425号、昭和11年9月、12～14頁。

¹⁹ この記念碑については清水恵美子「岡倉天心の顕彰をめぐって—五浦・赤倉・福井を中心に—」『五浦論叢』17号、平成22年、1～25頁)に詳しい。また、イザベラ・ステュワート・ガードナー美術館(ボストン)には建立当初の石碑の写真(Memorial Stone for Okakura Kakuzo at Echigo, Japan, 1913-1915)が所蔵され、同館webサイト(<https://www.gardnermuseum.org/experience/collection/33895>、令和5年12月1日閲覧)に掲載されている。稿者も令和4年12月26日、積雪の状況ではあったがこの石碑を実見した。昭和34年(1959)に建設された岡倉天心六角堂から少し離れた位置にあり、六角堂横にある同題(天心岡倉先生終焉之地)の大きな石碑は昭和17年(1942)岡倉天心偉績顕彰会によって建立されたものである。

新潟に来県したことになる。このうち、明治42年と大正3年には長岡の井口庄蔵のもとを訪れ、明治42年と大正5年の滞在は長期にわたるものであった。

3 観山作品を所蔵した新潟県人

前章では観山の新潟旅行の足跡の解明に新聞・雑誌等の記事を用いたが、以下では別の角度から検証を試みる。先の《普賢文殊》に関する章でも触れた観山の画集や遺作展目録等には、井口庄蔵、渡辺六松(清次郎)のほかにも、幾名かの県内所蔵家の名が記されている。これらを通して、彼の新潟旅行に関するさらなる手がかりを探ろうとするものである。

大正期には、後援組織「観山会」(明治44年渋沢栄一・高田早苗らが結成)によるものなど、観山の画集が多数回刊行されたが、ここでは井上徳三編『観山画集』(東京美術奨励会、大正6年)を取り上げる。この画集は観山12歳から発行年までの佳作を掲載した、観山初の集大成的作品集であった²⁰。また、先述の3つの観山遺作展のなかで最も規模が大きかった東京府美術館での展覧目録である『故下村観山遺作展覧会陳列品目録』(日本美術院、昭和6年)と、下村英時編『観山遺作集 乾・坤』(下村仙、昭和6年)を加える。

下表には、各文献において所蔵者の住所が「越後」「長岡」「新潟」等となっている作品を所蔵者別に列挙した。本稿では、観山の新潟旅行の解明を目的とするため、県出身者ながら当時東京在住だった者については、ここでは取り上げない。ただし、先述の「観山会」には、第4章で触れるように、新潟県にかかわりのある人物が多数参加しており、これらの文献にも彼らの所蔵品が少なからず含まれている。

井上徳三編『観山画集』 (東京美術奨励会、大正6年)	越後・井口庄蔵	《小倉山》明治42年 《漁夫[表面]》明治42年 《ほたる[裏面]》明治42年 《十牛之図》明治42年 《残雪之図》大正元年 《蝦蟇鉄拐之図》大正2年
	越後・渡辺六松	《美人と舍利之図》明治42年
	越後・石田友吉	《三聖之図》明治42年
	越後・新井徳次郎	《多聞天之図》明治43年
	越後・小畔亀太郎	《半諾迦尊者之図》明治43年
『故下村観山遺作展覧会陳列品目録』 (日本美術院、昭和6年)	長岡・渡辺清次郎	《龍虎 小下絵》前期日本美術院時代(明治31~39年) 《美人と舍利》五浦時代(明治40~大正3年) 《普賢文殊》五浦時代(明治40~大正3年)
	長岡・井口庄蔵	《小倉山》五浦時代(明治40~大正3年) 《雨中鷺》五浦時代(明治40~大正3年) 《孔雀 いそふ物語》五浦時代(明治40~大正3年) 《釈迦十六羅漢》五浦時代(明治40~大正3年) 《十牛》五浦時代(明治40~大正3年) 《蝦蟇鉄拐(ママ)》再興日本美術院時代(大正3~昭和5年) 《寿老》再興日本美術院時代(大正3~昭和5年)
	越後・池田忠蔵	《笛声》再興日本美術院時代(大正3~昭和5年)
	新潟・本間仁三郎	《若衆下図》下図及写生其他 《釈迦下図》下図及写生其他
下村英時編『観山遺作集 乾・坤』 (下村仙、昭和6年)	長岡・井口庄蔵	《小倉山》明治42年 《いそふ物語》明治42年
	長岡・渡辺清次郎	《美人と舍利》明治42年

以上の文献で観山作品所蔵者の全国分布を見ると、関東以外では新潟県の所蔵者が突出しており、その中では長岡の井口庄蔵の所

²⁰ 下村英時「下村観山伝」前掲註(10)191頁。

蔵品が多数を占め、彼が県内最大の観山後援者だったことは疑いがないようだ。また、各作品の制作年代に着目すると、観山の新潟旅行があった明治42年(1909)の作が多く、『下村観山伝』(139～140頁)においては、表で太字にした作品を本県滞在中の制作、あるいは滞在中の作と思われるもの、としている。さらに、翌43年(1910)の作品も散見される。これらは、旅行中に受注し、後年納品された作品とも推測できる。

《美人と舍利之図(美人と舍利)》の所蔵者が「渡辺六松」(『観山画集』)から「渡辺清次郎」(『故下村観山遺作展覧会陳列品目録』『観山遺作集 乾・坤』)に代わっているのは、先述の通りである。表中、制作年代が最も古いのは渡辺清次郎が所蔵した《龍虎 小下絵》で、唯一「前期日本美術院時代」(明治31～39年)の作となっており、明治42年当時の「五浦時代」には属さない。つまり、渡辺六松・清次郎家では、明治42年の来県以前から、観山との繋がりを持っていた可能性がある(勿論、制作時期と入手時期が異なる可能性も残る)。なお、清次郎の父・六松は先代清松の養嗣子となったが、この渡辺清松の名は、先述の日本美術院新潟絵画展覧会(明治33年)の「賛助員」のなかにも見ることができる²¹。

さらに、加茂町の石田友吉の名があり、彼が所蔵する《三聖之図》が本県滞在中の作とされる点も重要である。『下村観山伝』に記述のあった「新津、金津、三条」のほか、同じ北越鉄道(現在の信越線)沿線の加茂にも立ち寄った可能性が高いことになる。

以下においては、各所蔵家の人物像と主な所蔵品についてみていく。

■井口庄蔵

(1) 経歴²²

明治8年(1875)あるいは9年(1876)、井口利兵衛の長男として生まれ、明治27年(1894)家督を相続した。出生地は魚沼郡小千谷町(現在の小千谷市)か。石炭・コークス卸商で、三菱合資会社炭鉱部所有の炭田から採掘された石炭を新潟県内で販売した。また、小千谷石油株式会社(明治33年創立)の鉱区権所有者であり、山田又七(安政2～大正6)が明治26年(1893)に創設した宝田石油会社の大株主となり、第1回大合同翌期(明治35年)には持株数第9位となった。先述の小野強(天口)編『閻魔言』(明治44年)には井口庄蔵の項(5～6頁)もあり、「鉱業家」として紹介されている。宝田石油会社専属の機械工場である長岡鉄工所(明治40年、長岡市西神田町に設立)の取締役を務め、小千谷銀行の主要株主となり、繊維業にも携わった。大正10年(1921)小千谷で井口庄蔵商店を創業、長岡市観光院町にも同商店(運送業)を構えた。井口の邸宅は同じ観光院町内にあり、あるいは玉蔵院町にも別邸があったか。昭和7年(1932)に没した。

なお、三神正僚『新潟県人物誌』(越後会、大正7年、710～711頁)には、井口について以下のような人物紹介がある。

実業家 井口庄蔵君

長岡の地、盛名ある実業家に富みて、百花繚爛の壮観あり。即ち石油界に於ける、将たまた金融界に於ける何れも県下の代表的名流を網羅せるの観あり。而かも我が井口庄蔵君、新進の智才に加ふるに精励、賞財を兼ね備へ、以て株式会社長岡鉄工所の取締役として能く其の経営の要衝に在りて非凡なる好成績を奏しつゝ、あるは、郷人の齊しく敬仰して已まざる所なり。

言ふ迄もなく長岡鉄工所は石油界の渴望しつゝ、ある鉄材器械器具一切を製作供給するもの、其の事業成績によりて石油界に貢献せしことの大きなる、蓋し何人も想像外とする所、君其の重任を負ふて同所の経営に卓越なる才幹手腕を揮ふ。其の功たるや独り同所経営上のみならず越後事業界に寄与せし功勳の絶大なるを称せずんばあらずあらず。吾人は時局に鑑み、特に君の奮励努力を期待して已まざる也。(長岡市観光院町)

21 「新潟絵画展覧会賛助会員名簿(東北日報)」1900年(明治33)巴里・東京・新潟 近代日本画への模索と展開「展覧録、前掲註(6)114頁。「美術展覧会賛助員の贈金(第五回)10月10日」の項に「一金十円 渡辺清松」とある。

22 井口庄蔵の経歴については以下の文献を参照した。小野強(天口)編『閻魔言』明治44年。人事興信所編『人事興信録』5版、大正7年。三神正僚『新潟県人物誌』越後会、大正7年。日本風土民族協会編『越・佐傑人譜 昭和十四年度版』日本風土民族協会、昭和13年。藤井秀五郎『昭和美術百家選 第四十編 堆朱揚成』美術日報社、昭和16年。小千谷市史編修委員会編『小千谷市史 本編下巻』新潟県小千谷市、昭和42年。牧田利平編『越佐人物誌』野島出版、昭和47年。松本和明『新潟県小千谷地域における機械工業の生成と発展』長岡大学地域連携研究センター年報『地域連携研究』4号、平成29年。内藤隆夫『内部整理期以後の宝田石油—投機的鉱山資本の生涯—』東京経済大学経済学会『東京経大会誌 経済学』297号、平成30年。綿引宣道『明治期における長岡銀行と小千谷銀行を中心としたネットワーク分析の研究:主要株主と役員の人的ネットワーク』弘前大学経済学会『弘前大学経済研究』41号、平成30年。猪本爾六『特集 戦前の地元バトン文化のダイナミズムを追って 長岡青年美術愛好会“風羅会”』『マイ・スキップ』216号、平成31年1月。「会社案内」株式会社井口商店webサイト、<https://iguchi-shouten.co.jp/company/>(令和5年12月1日閲覧)。

次に、井口美術収集家としての側面を見る。下村観山画房日記『やまの上』(大正8年10月1日～同9年6月30日)にはたびたび井口の名が登場しており、大正期にも観山との関係が続いた²³。また、彼は観山のほか菱田春草とも親交が深かった。春草は明治43年(1910)12月27日、小田原に滞在し、翌年1月初旬に一時帰京したのち、再び小田原へ赴き、2月初旬に帰京している²⁴。小田原には井口庄蔵の別荘があり、井口に招かれた春草は、そこで滞在揮毫をおこなった。明治44年(1911)1月6日付で春草が従弟の高橋鍊逸に宛てた書簡では、三菱合資会社が依頼した同社新造船の食堂装飾の図案制作に難航し、「当家にての依頼の画幅」の揮毫もできないまま「図按手伝の者と共に日々厄介に」なっていることが記されている²⁵。その後春草は腎臓炎と網膜炎を悪化させ、同年4月23日付で春草が井口庄蔵に宛てた書簡では、井口を「小生の最も御同情被下るゝ方」と呼び、当時の病状と悲痛な心境とを綴っている²⁶。春草はこの年の9月16日に36歳で没しているが、翌45年(1912)4月2～6日、東京美術学校で「故菱田春草君追悼展覧会」が開催された際、井口は発起人の一人となり、併設された周辺画家による新作展の材料として金屏風を寄付している²⁷。

なお、美術品収集の趣味は次男吟次郎にも引き継がれた。吟次郎は明治31年(1898)小千谷に生まれ、後に庄蔵を襲名した。昭和戦前期に駒形十吉(明治34～平成11)らとともに長岡青年美術愛好会「風羅会」を結成し、井口商店社長、新潟日報常務、新潟放送・北越印刷・大光相互銀行各取締役を務めた。昭和38年(1963)に没した。

(2) 所蔵品

観山・春草のほか、狩野芳崖、橋本雅邦等を所蔵した。

下村観山	《小倉山》(金地六曲折一双) 明治42年 《漁夫[表面]》(絹本) 明治42年 《ほたる[裏面]》(絹本) 明治42年 《十牛之図》(色紙帖) 明治42年 《残雪之図》(絹本尺八) 大正元年 《蝦蟇鉄拐之図》(尺八絹本双幅) 大正2年	井上徳三編『観山画集』 (東京美術奨励会、大正6年)
	《小倉山》(金地六曲屏風一双) 五浦時代 《雨中鷺》(紙本四尺巾横物) 五浦時代 《孔雀 いそぶ物語》(金地二曲屏風一双) 五浦時代 《釈迦十六羅漢》(絹本二尺条本対幅) 五浦時代 《十牛》(金地色紙画帖) 五浦時代 《蝦蟇鉄拐(ママ)》(絹本尺八条本対幅) 再興日本美術院時代 《寿老》(金地六曲屏風一双) 再興日本美術院時代	『故下村観山遺作展覧会陳列品目録』 (日本美術院、昭和6年)
	《小倉山》(紙本 金地六曲屏風一双) 明治42年 《いそぶ物語》(紙本 金地二曲屏風一双) 明治42年	下村英時編『観山遺作集 乾・坤』 (下村仙、昭和6年)
菱田春草	《雨中鷺》《中寿老左右春秋花鳥》(三幅対) 《春夏秋冬花鳥》(三幅対)	春草遺墨展覧会編『春草画集』 (画報社、明治45年)
	《老松に双鶴》《竹に猫》《雪中の木枯》《雨中鷺》 《春日鹿》《春秋花鳥、寿老人三幅対》《春夏秋冬花鳥》	日本美術年鑑編集部『日本美術年鑑』3巻 (画報社、大正2年)
狩野芳崖	《薬師如来》	『美術画報』40編巻8 (大正6年6月)
橋本雅邦	《月夜山水図》(絹本淡彩 縦三尺七寸 横一尺三分五寸)	『雅邦大観』4輯 (画報社、大正2年)
	《山居月夜図》	『美術画報』25編巻1 (明治42年2月)
	《秋山狩獵図》	『美術画報』25編巻2 (明治42年2月)

23 柏木智雄【資料紹介】下村観山画房日記『やまの上』『横浜美術館研究紀要』16号、平成27年、61～87頁。

24 「年譜」『菱田春草』展図録、東京国立近代美術館、平成26年、237頁。

25 小島淳【資料紹介】高橋鍊逸宛菱田春草書簡「飯田市美術博物館研究紀要」18号、平成20年、7～20頁。

26 小高根太郎「菱田春草 生涯と作品」菱田春夫編『菱田春草』大日本絵画巧芸美術、昭和51年、52～53頁。

27 「菱田春草遺墨展覧会」財団法人芸術研究振興財団・東京芸術大学百年史刊行委員会編『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第二巻』ぎょうせい、平成4年、533～534頁。



図10・11 下村観山《漁夫》《ほたる》明治42年 [出典：井上徳三編『観山画集』東京美術奨励会、大正6年]
画像提供：東京文化財研究所

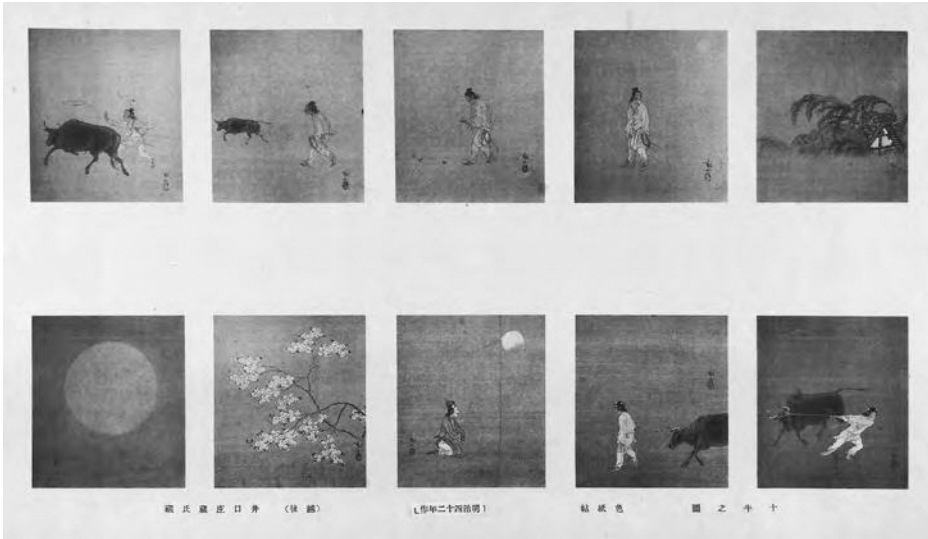


図12 下村観山《十牛之図(十牛)》明治42年 [出典：『観山画集』] 画像提供：東京文化財研究所

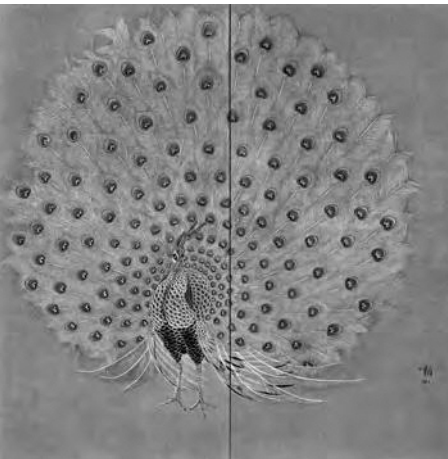
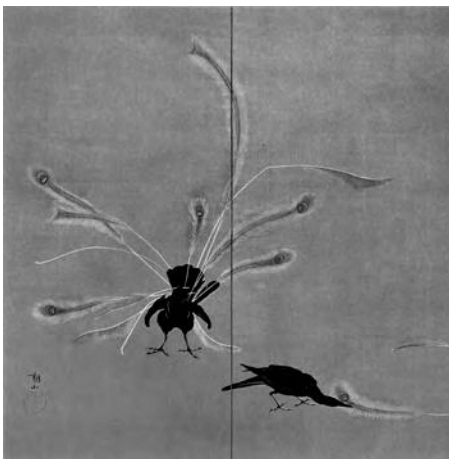


図13 下村観山《孔雀 いそぶ物語(いそぶ物語)》明治42年
[出典：『長岡市井口家所蔵品入札』東京美術倶楽部、昭和14年5月22日]

《小倉山》については先述の通りである。《漁夫》[図10]と《ほたる》[図11]は衝立の両面に描かれた。《十牛之図(十牛)》[図12]は、禅宗で悟りに至る十の段階を十枚の色紙に描き分けた作品である。《孔雀 いそぶ物語(いそぶ物語)》[図13]は、イソップ寓話の「虚飾のカラス」に基づく作品で、観山は明治34年(1901)の第11回日本絵画協会・第6回日本美術院連合絵画共進会にも同一題材の《伊弉古話》(六曲一双屏風)を出品し銀牌第一席を得ており、同39年(1906)の日本絵画会展覧会(日本美術院絵画展覧会)にも《伊蘇普物語(孔雀に鴉)》(二曲一双屏風)を出品している。また木村武山は明治45年(1912)の故菱田春草君追悼展覧会に《孔雀に鴉》を出品し、大正元～2年(1912～1913)頃に《イソップ物語》(茨城県近代美術館蔵)を描くなど、類品が多い。

■渡辺六松

(1) 経歴²⁸

弘化2年(1845)、渡辺金平の五男に生まれ、長岡市表三ノ町の先代渡辺清松の養嗣子となり、明治38年(1905)家督を相続した。嘉永年間創業の太物商(のち唐物商)で、屋号を「大坂屋」、通称を「大清」といった。

28 渡辺六松の経歴については以下の文献を参照した。坂井雲舟「訪問記」速報社、明治40年。加賀幸三「奮闘の長岡」北越新報社、大正3年。人事興信所編「人事興信録」4版(大正4年)、5版(大正7年)、6版(大正10年)、7版(大正14年)、8版(昭和3年)。三神正僚「新潟県人物誌」越後会、大正7年。長岡市役所編「長岡市史」昭和6年。坂井新三郎「越佐と名士」越佐と名士刊行会、昭和11年。牧田利平編「越佐人物誌」野島出版、昭和47年。村島靖雄編「越佐人名辞書」歴史図書社、昭和49年。内山喜助編「ふるさとの想い出 写真集 明治大正昭和 長岡」国書刊行会、昭和55年。新潟日報事業社出版部編「写真集 ふるさとの百年 長岡」新潟日報事業社、昭和57年。長岡市編「長岡市史 通史編下巻」平成8年。長岡市編「ふるさと長岡の人々」平成10年。「長岡歴史事典」長岡市、平成16年。100周年誌執筆企画委員会編「長岡商工人 百年の軌跡—不死鳥のまちを支えた商工人名録—」長岡商工会議所、平成23年。松本和明「新潟県小千谷地域における機械工業の生成と発展」『長岡大学地域連携研究センター年報 地域連携研究』4号、平成29年。内藤隆夫「内部整理期以後の宝田石油—投機的鉱山資本の生涯—」東京経済大学経済学会「東京経済学会誌 経済学」297号、平成30年。内山弘「渡辺藤吉の事績」長岡郷土史研究会「長岡郷土史」58号、令和3年。

六松は、長岡鉄工所、長岡製糸場、長岡鉄道、寺泊海陸運輸などを創立し、北越製紙株式会社の創立(明治40年)に貢献した。先述の井口同様に宝田石油会社の大株主で、第1回大合同翌期(明治35年)に持株数第7位、第1次大戦期(大正4年)には第3位となっている。六松長女タツと結婚した渡辺藤吉(安政6～昭和19)は三島郡片貝村(現在の小千谷市)の出身で、明治7年(1874)観光院町に分家独立し、宝田石油会社の専務として石油会社の大合併を推進した。また、六松次女ムラ(明治9年生まれ)は井口庄蔵に嫁いだ。藤吉について、井口庄蔵との姻戚関係を示す資料もあるが、この義妹の関係に加え、小千谷の生家においても繋がりがあったのかどうかは分からない。

六松は、岸宇吉(天保10～明治43)を中心とする「ランプ会」(文明開化を象徴する西洋行灯を囲み、戊辰戦争後の長岡の復興や商業のあり方、銀行の設置などが話し合われた学習会)の常議員の一人であった。長岡商業会議所の設立(明治38年)にも尽力し、初代会頭は藤吉が務めた。商人であるとともに大地主で、123町歩(約123ヘクタール)を所有した。また、六十九銀行(現在の第四北越銀行の源流の一つ)の取締役も務めている。第六十九銀行は、福沢諭吉・渋沢栄一の意見を聞き、明治11年(1878)表三ノ町に国立銀行として開業し、石油ブーム、商工業発展の波に乗り、次第に事業を拡大、明治31年(1898)株式会社となった。表三ノ町の本店は、表町通を隔てて渡辺六松邸(大坂屋)の斜向かいにあった。

六松は昭和4年(1929)に没し、長男清次郎(明治11年生まれ)が家督を相続した。

六松の美術収集家としての側面は、坂井雲舟『訪問記』(速報社、明治40年、113～116頁)の記述から窺い知ることができる。自ら文人画を描き、書画骨董の趣味があり、その所蔵品は膨大な数に上ったという。以下に引用する。

三七 長岡市 渡辺六松君

◎十畳許りなる茶之間に案内され、共に坐に著く、氏は中々綿密なる実業家たるに似合はず、剽軽なる人にて、時々悪戯をなし、人と共に其滑稽を笑て快となす

◎画に巧にして、殊に文人画を画く、筆致老熟、且奇峭、多く学ばずして此筆あるかと感ぜしむ、自ら画く丈けに画の鑑賞にも得る所あり、人の之を質するや今古の諸家を月旦し、言証とし、頗る其細に入る

◎道に大家なり、書画骨董を蔵するに於ては、越後既に名あり、夏時之を曝す、殆ど数日に亘ると、而して是悉く逸亦珍たるもの、訪ふて之を見るもの一人として驚かざるなしと(後略)

冒頭の「剽軽なる人にて、時々悪戯をなし、人と共に其滑稽を笑て快となす」という六松の人柄は、彼が所蔵した《美人と舍利之図(美人と舍利)》《普賢文殊》等の奇抜な趣向と関係があると思われ、依頼者である六松の意を酌んで制作された可能性がある。

(2)所蔵品

観山のほか、狩野芳崖、菱田春草等を所蔵した。

下村観山	《美人と舍利之図》(絹本尺八双幅) 明治42年	井上徳三編『観山画集』 (東京美術奨励会、大正6年)
	《龍虎 小下絵》(紙本尺五横物対幅) 前期日本美術院時代	『故下村観山遺作展覧会陳列品目録』 (日本美術院、昭和6年)
	《美人と舍利》(絹本尺八条本対幅) 五浦時代	※渡辺清次郎名義
	《普賢文殊》(金襴地尺八条本対幅) 五浦時代	
	《美人と舍利》(紙本 一尺八寸巾 対幅) 明治42年	下村英時編『観山遺作集 乾・坤』 (下村仙、昭和6年) ※渡辺清次郎名義
狩野芳崖	《猿猴》	梅沢精一『芳崖と雅邦』(純正美術社、大正9年)
菱田春草	《遊狸》《枯野》	日本美術年鑑編集部『日本美術年鑑』3巻 (画報社、大正2年)

《美人と舍利之図(美人と舍利)》[図14]は、「生誕140記念 下村観山展」(横浜美術館、平成25年)に画廊所蔵作品として出品され、平成28年度に豊田市美術館が購入した。同館の研究紀要において藤井享子は、右幅に描かれる女性の衣服の文様から、『源氏物語』や能の『葵上』に登場する六条御息所を描いた可能性を指摘し、右幅の美人は六条御息所の生霊で、左幅の舍利は死、すなわち彼女が死に至らしめた葵上の死に加えて、六条御息所自身の死霊を表す、との解釈を示した²⁹。《美人と舍利之図(美人と舍利)》から9年後の大正7年(1918)に上村松園(明治8～昭和24)が発表した《焔》(第12回文展、東京国立博物館蔵)もまた、六条御息所を描いた作品であり、藤井は、先行する観山作品が参考にされた可能性にも言及している。《美人と舍利之図(美人と舍利)》の制作当時に出品の機会がなかったとすれば、大正6年(1917)の『観山画集』の刊行が公の目に触れる初の機会と考えられ、これに触発された松園が翌7年に《焔》を制作した、との推測も成り立つ。

その一方、《美人と舍利之図(美人と舍利)》の女性と骸骨との取り合わせは、西洋美術の「メメント・モリ」「死と乙女」等の伝統主題を想わせ、左幅の骸骨にみる細密な写実表現についても、西洋絵画からの影響を考慮しない訳にはいかない。骸骨と女性が相対する本作品の構図は、奇しくもベルギーの画家アントワヌ・ヴィールツ(Antoine Wiertz, 1806～1865)の代表作《麗しのロジヌ》(1847年、ブリュッセル・ヴィールツ美術館蔵)と類似する。伊澤朋美の指摘によれば、観山は明治38年(1905)8月24日に彫刻家・武石弘三郎の案内でヴィールツ美術館を訪問しているが³⁰、この時に《麗しのロジヌ》を見たかは不明である。

■石田友吉

(1) 経歴³¹

明治4年(1871)、蒲原郡加茂町(現在の加茂市)に石田友蔵の長男として生まれる。石田家は、江戸時代終わり頃に七谷の高柳村から上条村に居を移し、急速に土地を集積、明治34年(1901)には田を中心に171町歩の土地を所有する大地主であった。農業のほか、特産品加茂縞の染色業も営み、明治30年(1897)には加茂貯蓄銀行(のちの加茂銀行)を設立、金融業にも手腕を揮った。

友吉は大正4年(1915)に家督を相続した。新潟硫酸、三条瓦斯、蒲原鉄道、日本原毛(各株)取締役、長岡天然瓦斯・加茂銀行(各株)監査役を務め、昭和5年(1930)に没した。



図14 下村観山《美人と舍利之図(美人と舍利)》明治42年
豊田市美術館蔵 [出典:『観山画集』]
画像提供:東京文化財研究所



図15 初代五姓田芳柳《石田友衛・友蔵・友吉像》(部分、左下が友吉) 明治19年 石田ルリ子氏蔵
[出典:加茂市史編集委員会編『加茂市史 資料編6 文化財』加茂市、令和2年]

²⁹ 藤井享子「下村観山『美人と舍利』を読み解く—河骨と芭蕉葉文様を手がかりに—」『豊田市美術館紀要』13号、令和3年、4～17頁。

³⁰ 観山によるヴィールツ美術館訪問については岡精一「伊太利の旅(一)」(『みづゑ』64号、明治43年7月、22～28頁)に記述がある。この件については、「ミュージアムシート039 ベルギーと日本—光をえがき、命をかたどる」(目黒区美術館、令和5年、3頁)の山田真規子による記事でも紹介されている。

³¹ 石田友吉の経歴については以下の文献を参照した。人事興信所編『人事興信録』5版(大正7年)、8版(昭和3年)、9版(昭和6年)。「五姓田GOSEDA—明治新潟の人々を描いた絵師—」展図録、新潟市歴史博物館、平成21年。溝口敏磨「石田友蔵・友吉の肖像」[かも市史だより]21号、平成22年3月。羽生生寛興「近代加茂町の重立 石田友吉の肖像」[かも市史だより]39号、平成31年3月。加茂市史編集委員会編『加茂市史 資料編6 文化財』加茂市、令和2年。

明治19年(1886)8月、来県中の初代五姓田芳柳(文政10～明治25)が初代友衛、二代目友蔵、三代目友吉の肖像画[図15]を描いている。芳柳は前年の明治18年(1885)5月から4か月間、新潟町に滞在したが、その際、各地の名士や資産家から肖像画の制作依頼が多数寄せられたため、翌年にも来県し、石田家に滞在してこの肖像画を描いたと考えられている。なお、友吉の肖像彫刻(作者不明、昭和6年以降の作)も残されている。



図16 下村観山《三聖之図》明治42年
[出典:『観山画集』]
画像提供:東京文化財研究所

(2)所蔵品

下村観山	《三聖之図》(尺八絹本) 明治42年	井上徳三編『観山画集』 (東京美術奨励会、大正6年)
菱田春草	《女竹に雲雀》	春草遺墨展覧会編『春草画集』 (画報社、明治45年)

観山《三聖之図》[図16]は明治42年(1909)の作で、『下村観山伝』においては、井口庄蔵の所蔵品以外では唯一「(新潟)滞在中の作と思われるもの」としている。釈迦・孔子・キリストを描いた作品で、横山大観が明治35年(1902)の第13回日本絵画協会・第8回日本美術院連合絵画共進会に出品した《迷児》を想起させる。

■新井徳二郎

(1)経歴³²

明治12年(1879)、新潟県士族である新井能蔵の長男として現在の長岡市に生まれる。明治35年(1902)公債株式業界に入るが、同37年(1904)日露戦争に出征。鎮南浦に上陸し、九連城、雪裡站、摩天嶺、石門嶺等の戦闘に参加。負傷して内地に後送されたが、退院後補充大隊に編入され、大連に上陸、老爺嶺での戦闘に参加。勲功により金鷄勲章を受章した。大正10年(1921)、長岡市に新井株式現物商を開き、同市における公債株式現物商の代表的人物となった。狩猟と釣りを趣味とし、曹洞宗を信仰した。

長岡市東神田町に住み、新井株式現物商の営業所は同市王蔵院町にあった。

文献により名前の表記(徳二郎、徳次郎)に揺れがある。下村観山画房日記『日記帳』の大正9年(1920)12月11日の項に「新井徳二郎氏(長岡市東神田町)より、梨の送附案内状着」と記され、同月14日に新井から梨が届き、翌15日に礼状を出したことが記されている³³。

(2)所蔵品

下村観山	《多聞天之図》(絹本中八寸丈五尺) 明治43年	井上徳三編『観山画集』 (東京美術奨励会、大正6年)
------	-------------------------	-------------------------------

四天王のうち北方を守護する武神である多聞天の画像[図17]を所蔵した。これを日露戦争に出征した所蔵者の経歴と結び付けるのは穿ち過ぎだろうか。



図17 下村観山《多聞天之図》
明治43年 [出典:『観山画集』]
画像提供:東京文化財研究所

32 新井徳二郎の経歴については以下の文献を参照した。内田安蔵編『征露紀念 軍人名誉肖像録 全』東江堂、明治41年。日本風土民族協会編『越・佐俣人譜 昭和十四年度版』日本風土民族協会、昭和13年。

33 柏木智雄【資料紹介】下村観山画房日記『日記帳』『横浜美術館研究紀要』20号、平成31年、52～54頁。

■小畔亀太郎

(1) 経歴³⁴

慶応3年(1867)、神奈川県士族の小畔定太郎の長男として生まれ、長岡市東千手町に住んだ。定太郎は明治10年(1877)の西南戦争で戦死し、同年亀太郎が家督を相続した。

長岡商業会議所の設立に尽力し、六十九銀行株式会社専務取締役、長岡貯蓄銀行株式会社取締役を務めた。六十九銀行、長岡商業会議所のいずれにも渡辺六松がかかわっており、小畔は六松と親交があった可能性がある。坂井雲舟『訪問記』(速報社、明治40年、59～63頁)には、明治39年(1906)12月の日付、「六十九銀行支配人」の肩書による小畔の県内経済に関する談話が掲載されている。小野強(天口)編『閻魔言』(明治44年、99～101頁)にも小畔の項があり、明治42年(1909)4月の日付で「六十九銀行支配人」の肩書となっている。

著書に『岸宇吉翁』(明治44年)、『東亜遊記』(大正8年)、『父のおもかげ』(大正15年)がある。大正15年(1926)に没した。



図18 下村観山《半諾迦尊者之図》明治43年 [出典:『観山画集』
画像提供:東京文化財研究所]

(2) 所蔵品

下村観山	《半諾迦尊者之図》(絹本尺八双幅) 明治43年	井上徳三編『観山画集』 (東京美術奨励会、大正6年)
寺崎広業	《星降りの梅》(絹本着色 縦四尺八寸一分五厘 横一尺八寸五分) 35歳作	『広業画譜 肇輯』(審美書院、明治43年)
菱田春草	《菘に雀》《椿に小禽》《石座観音》	春草遺墨展覧会編『春草画集』 (画報社、明治45年)

《半諾迦尊者之図》[図18]は十六羅漢の一人を描いた作品である。

■池田忠蔵

(1) 経歴³⁵

明治6年(1873)、先代池田忠蔵の長男として生まれた。幼名忠次郎。明治34年(1901)家督を相続し、忠蔵を襲名した。長岡の織維問屋街の中心地であった裏二ノ町(のち本町2丁目、渡辺六松邸のあった表町通から一本西側の通りに面する)で呉服・太物・洋品・雑貨卸小売業の立見屋(たつみ屋)を営んだ。立見屋呉服店は文治元年(1864)創業で、江戸と往来し、羅紗などの仕入れ販売にあたった。長岡を代表する呉服商として、いち早くショーウィンドーを導入するなど、経営の新機軸を打ち出したが、昭和20年(1945)の戦災で焼失した。大正3年頃の立見屋呉服店の外観写真が内山喜助編『ふるさとの思い出 写真集 明治大正昭和 長岡』(国書刊行会、昭和55年、58頁)に掲載され、坪井政太郎編『絵画北越商工便覧』(大正8年)には店構えのイラストが掲載されている。

このほか池田は、長岡商業銀行、長岡商事、青島洋行(各株)取締役、六十九銀行、長岡貯蓄銀行(各株)監査役を務めた。長岡商業諮詢会員となり、長岡商業会議所設立発起人に名を連ね、同所(明治38年設立、昭和2年長岡商工会議所に改組)の議員・常議員・副会頭

34 小畔亀太郎の経歴については以下の文献を参照した。坂井雲舟『訪問記』速報社、明治40年。小畔亀太郎編『岸宇吉翁』明治44年。小野強(天口)編『閻魔言』明治44年。人事興信所編『人事興信録』3版(明治44年)、4版(大正4年)、5版(大正7年)、6版(大正10年)、7版(大正14年)。「官報」4163号、内閣印刷局、大正15年7月9日。100周年誌執筆企画委員会編『長岡商工人 百年の軌跡—不死鳥のまちを支えた商工人名録—』長岡商工会議所、平成23年。

35 池田忠蔵の経歴については以下の文献を参照した。坪井政太郎編『絵画北越商工便覧』大正8年。人事興信所編『人事興信録』8版(昭和3年)、9版(昭和6年)、10版(昭和9年)、11版(昭和12年)、12版(昭和15年)、13版(昭和16年)、14版(昭和18年)。坂井新三郎『越佐と名士』越佐と名士刊行会、昭和11年。日本風土民族協会編『越・佐傑人譜 昭和十四年度版』日本風土民族協会、昭和13年。内山喜助編『ふるさとの思い出 写真集 明治大正昭和 長岡』国書刊行会、昭和55年。新潟日報事業社出版部編『写真集 ふるさとの百年 長岡』新潟日報事業社、昭和57年。100周年誌執筆企画委員会編『長岡商工人 百年の軌跡—不死鳥のまちを支えた商工人名録—』長岡商工会議所、平成23年。

顧問・理事を歴任した。なお、六十九銀行の重役を務めたこと、長岡商業会議所の設立に尽力したことで渡辺六松や小畔亀太郎と同じであり、両者と近い関係にあったと推察される。また、長岡繊維小売商業組合長、長岡実業組合連合会長を務めた。昭和31年(1956)没。

(2) 所蔵品

下村観山	《笛声》(絹本三尺横物) 再興日本美術院時代	『故下村観山遺作展覧会陳列品目録』 (日本美術院、昭和6年)
------	------------------------	-----------------------------------

■本間仁三郎

(1) 経歴

この人物については特定に至らなかった。

(2) 所蔵品

下村観山	《若衆下図》(紙本尺巾小点) 下図及写生其他 《釈迦下図》(紙本尺五条本) 下図及写生其他	『故下村観山遺作展覧会陳列品目録』 (日本美術院、昭和6年)
------	--	-----------------------------------

こうして新潟県内の観山作品所蔵者の陣容を見渡すと、いずれも当時の実業界を代表する人物で、殆どが長岡を活動拠点とし、幕末・維新期生まれの世代で年齢も近い(渡辺六松のみ一代早い)ことがわかる。彼らは、この地で活況を呈した石油採掘事業や、地元の商工業を支えた六十九銀行、長岡商業会議所などのキーワードで相互に繋がっており、さらに、井口庄蔵と渡辺六松は縁戚関係にあった。また、観山に加えて菱田春草の作品も所蔵したケースが多い。

長岡周辺の実業家による美術品収集の様相は、以下に示す二つの資料によって概観することができる。その一つ目は、本稿脱稿直前に閲覧が叶った、渡辺六松自身の発行による長岡後素会編『明治画集』(大正元年) [図19]である。巻頭の「小引」には「長岡後素会は美術思潮を發達し趣味の向上を鼓吹せんが為め地方同好者の愛蔵絵画を時々一堂に蒐め江湖の展観に供す」とあり、同会が開催した「秋季展覧会」の陳列品中、明治期の作品約100点(正確には92点)を選抜し掲載した画集である。掲載作品は橋本雅邦、下村観山、児玉果亭、横山大観、森寛斎、寺崎広業、川合玉堂、菱田春草など多岐にわたり、それらの所蔵者として全35名の名が記されている。そこには、本章で既に紹介した観山所蔵者、つまり井口庄蔵・渡辺六松・石田友吉・小畔亀太郎・池田忠蔵のほか、渡辺六松の娘婿であった渡辺藤吉、また宝田石油会社の創業者である山田又七の名も見える³⁶。当時の長岡周辺の実業家たちは殆ど例外なく近代日本画コレクションを有していたと思われる程である。本画集に掲載される観山作品とその所蔵者を以下に示す(掲載順)。



図19 長岡後素会編『明治画集』
(渡辺六松、大正元年)表紙
神奈川県立図書館蔵

³⁶ 長岡後素会編『明治画集』(渡辺六松、大正元年)の所蔵が確認できるのは、目下、神奈川県立図書館のみである。本画集掲載作品の所蔵者全35名は次の通り。川上佐太郎、渡辺六松、小畔亀太郎、井口庄蔵、渡辺藤吉、渡辺嘉政、酒井文吉、松井吉太郎、目黒十郎、池田忠蔵、山田又七、星野伊三郎、岸五郎、遠藤六太郎、柄沢政雄、佐藤惣吉、熊倉福松、石田友吉、関真次郎、高頭仁兵衛、高頭又一、池田寅次(治)郎、藤井卯吉、清水常作、矢島五一郎、佐藤文吉、小竹忠三郎、山田竹藏、渡辺太左衛門、渡部介、佐藤善太郎、安原久八、羽賀虎三郎、星名佐藤治、渋谷善作。

《漁樵問答》(絹本着色、双幅、各竪四尺六寸三分横一尺八寸)	渡辺六松
《寿星》(絹本着色、竪四尺横一尺六寸五分)	小畔亀太郎
《十六羅漢》(絹本極彩色、双幅、各竪四尺六寸横一尺九寸)	井口庄蔵
《納涼》(絹本着色、竪四尺二寸五分横一尺七寸)	川上佐太郎
《夕月》(絹本着色、竪三尺七寸横一尺三寸五分)	目黒十郎
《寿老》(絹本着色、竪四尺六寸八分横一尺六寸八分)	佐藤惣吉
《蜆子》(絹本墨画、竪三尺七寸横一尺三寸五分)	小畔亀太郎

井口所蔵の《十六羅漢》のみ、前述の『故下村観山遺作展覧会陳列品目録』に記載される《釈迦十六羅漢》と同一と思われるが、その他の作品は初見である。また、この資料からは新たな観山所蔵者の名も明らかとなった。川上佐太郎(明治6～大正10)は表五ノ町の米穀商(川佐)で、初代佐太郎(弘化4～明治41)の養嗣子となった人物である。目黒十郎(明治23～没年不詳)は表四ノ町の書籍商(鳥十)で、五代目十郎(生年不詳～明治23)の事業を継承した。佐藤惣吉(明治4～大正9)は蔵王町の油商(油惣)で、先代惣造の事業を継承した。

もうひとつの資料は山田武雄(明治10～昭和27)が大正14年(1925)に著した『長岡』(覚張書店・酒井書店)である。山田は井口庄蔵の親戚であり、自身も初めは石油事業に携わり、長岡商業会議所の書記長を務め、弁護士に転じた経歴を持つ³⁷。「第十六章 長岡人の趣味」の冒頭部分を引用する(傍線は稿者)。

長岡は遊覧すべき適當の場所もなく、又た娯楽場の設備も至つて不完全である。従つて他に何等かの娯楽を求むる外心を慰むる方法がない、此等の為には長岡人の趣味は比較的各種の方面に発達した。

美術、長岡には書画骨董を商ふ商人が多い、従つて書画骨董に相当理解を有する人が多からうと想像さるゝけれども、其实書画骨董よりは金と云ふ人が多く、真に美術工芸品を理解して楽しむと云ふよりは高価なる品を持つて居ると云ふ一種の誇りの為には書画骨董を買ひ集むる嫌がある。然し一部には芸術品に対して理解を有し美術の奨励を為し居る熱心家がある。

東千手町の小畔亀太郎氏、観光院町の井口庄蔵氏の如きは就中熱心なるもので新画の如きは長岡の人が未だ何等の注意を払はざりし時代より美術には古今の差あるべき訳がないと云ふ見解の下に大に新画趣味を鼓吹し長岡地方に新画を紹介した元祖である井口庄蔵氏方に下村観山、木村武山、横山大観、川合玉堂、安田靉彦、川端龍子の如き諸大家が屢々來られたことを以ても其熱心の程を知り得べきである。

尚ほ又た小畔、井口両氏は新画のみならず彫刻、漆工、陶磁器、蒔絵等にも相当理解を有して坂ノ上町二丁目渋谷善作氏、玉蔵院町羽賀虎三郎氏等の愛好家と共に現代一流の大家の作品を蒐集し大に芸術品に対する趣味を鼓吹して居らるゝことは田舎としては珍らしいと云ふの外ない。以上諸氏の同好者なる東千手町山岸普該氏の如きは、近來板谷波山先生に就き樂焼を研究して悠久山のお山焼を復興せんと意気込んで居らるゝ。長岡に常に遊歴画家が滞在し居ることや、素人書画展覧会迄も開催するに至つたことは畢竟以上諸氏の美術奨励の熱心が直接間接に与つて力あると云ふべきである。然し長岡には芸術作品として特別に推賞すべきものはないが、唯だ小川悠山、安達祥山二氏の紫檀細工は他に誇るに足り竹塗細工が近來稍々其名を知らるゝに至つたことは喜ぶべきことである。³⁸

山田の文章からは、長岡の有力者の中で美術品収集の趣味が共有され、なかでも小畔亀太郎、井口庄蔵らが新画(近代日本画)愛好家の代表格であったこと、そして井口は観山以外の多くの画家とも交流をもったことが読み取れる。明治42年の観山らの來県は、このように層の厚い美術収集家たちへの販路拡大を目的としたものであり、その目的は達せられたとみて間違いないだろう。今回おこなった郷土史家・猪本爾六氏への聞き取り調査においても、観山は長岡の多くの人物から世話を受け、彼らの依頼で絵を描いており、その一部は現在も残っているとの証言が得られた。

37 川端龍子「青龍社二十五年あれこれ」藤本昭三編『龍子画業二十五年 青龍社とともに』美術出版社、昭和28年、30頁。小山栄吉編『長岡人物評論』1編、九非山房、大正3年、22～23頁。
38 山田武雄『長岡』覚張書店・酒井書店、大正14年、242～244頁。

5 観山の新潟旅行が遺したもの

ここでは、観山の新潟旅行の「遺産」、あるいはその後に遺した影響について考察してみたい。その最大のものは、これまで述べてきたように、多くの新潟県人の美術品収集熱を刺激し、井口庄蔵の《小倉山》を始め、多数の観山作品が県内所蔵家によって愛蔵されたという事実であろう。

これらの作品の「その後」については本章の末尾に述べるとして、それ以外の重要な事柄を二つ挙げてみたい。その一つ目は、観山の来訪がきっかけとなり、漆芸家・20世堆朱楊成（通称豊五郎、明治13～昭和27）の愛好会「楊成会」が新潟県で設立されたことである。藤井秀五郎『昭和美術百家選 第四十編 堆朱楊成』（美術日報社、昭和16年、27～30頁）の「六、長岡と楊成」では次のように述べられている（傍線は稿者）。

楊成の作品が全国中最も数多くあるのは新潟県で、其中で特に蒐集されてゐるのは長岡市である。その関係を述べるには同市の旧家井口庄蔵氏のことを逸することは出来ぬ。楊成をして今日の大を成さしめた其一因は、同氏の力であるからである。

「相識」美術愛好家として、全国に其人ありと知られた井口庄蔵君は曾て岡倉天心とも交りがあり、従つて日本美術院の同人で氏に交渉を持たぬ人は無いであらう。明治四十一（ママ）年に下村観山が長岡へ行き、井口家で例の有名な小倉山の六曲屏風を描いて居る時のこと、楊成が越路の旅の路すがら交友の観山を訪れた、観山は井口氏に彼を紹介した。（中略）其他井口氏は同好の間にも彼を紹介して以来幾星霜、彼は諸家の依頼に応じて居たが、爰に又愛好家で、「小畔亀太郎」と云ふ実業家があつて、多大の楊成最真で遂に井口氏と共に、同地十数人の同好者と相謀り、楊成会なるものを組織したのである。（後略）

松原幸二によれば、20世楊成は明治41年（1908）古美術研究のため奈良・京都をはじめ諸方を遊歴したが、新潟県へも足をすすめ、長岡の井口庄蔵邸に友人の下村観山が寄留していることを思い出して訪ねたという³⁹。この「楊成会」では、昭和4年（1929）に『堆朱作品図録』を刊行した。巻頭には楊成会同人の氏名が列挙され（イロハ順、傍線は稿者）、同書奥付によると、その代表者は井口庄蔵が務めた。

石田友吉 井口庄蔵 羽賀虎三郎 大塚研太郎 長部松三郎 渡辺六松 山口健造 山岸普該 藤田清太郎 目黒十郎
源川万吉 渋谷善作 関真次郎

傍線を付した石田・井口・渡辺・目黒に、前掲の藤井秀五郎の文章で触れられた小畔亀太郎を加えた5名は、先述のように、いずれも観山作品の所蔵者であった。ここに小畔の名前がないのは、彼が図録刊行前の大正15年（1926）に没しているからである。このことについて、図録の巻頭辞では「此企の興るや終始一貫其成就に尽力せられたる本会同人小畔亀太郎氏半途にて、昨春白樓玉中の人となり今やなし、図録の完成を見るに及び更に氏を慨憶するの念深きものありて存す。」と述べられている。

観山が明治42年の新潟旅行で井口庄蔵以外のどのような人物と面会したかについて、前章では、作品所蔵者からの類推を試みた訳だが、先掲の『明治画集』や山田武雄の文章、いま示した「楊成会」の事例等によって、その大まかな構図が見えてきたように思われる。つまり、当時「新画趣味を鼓吹」していた井口や小畔が中心となり、彼らの「同好の間」、つまり周辺の実業家（長岡の人物のみならず加茂の石田友吉も含む）に対して観山の来訪が紹介され、観山は井口邸を拠点としながら、多くの周辺人物からの依頼制作に勤しんでいた、ということなのではないだろうか。

39 松原幸二「20世堆朱楊成とその作品」『敦井美術館名品図録』財団法人 敦井コレクション 敦井美術館、平成5年、86～87頁。

豪華な原色版印刷による『堆朱作品図録』は300部限定で刊行され、同人の所蔵品(亀太郎子息である小畔震蔵の所蔵を含む)を中心とする114点が収録された。掲載作品のうち《野遊之図料紙文庫》[図20]および《野遊之図硯笥》[図21](ともに大正3年)は、下村観山が下絵を描き、東京大正博覧会(大正3年)で二等賞銀牌を受賞し、20世楊成の出世作となったもので、『堆朱作品図録』刊行当時は井口庄蔵が所蔵し、現在は敦井美術館(新潟市)の蔵品となっている。

さて、観山らの新潟旅行のもうひとつの「遺産」は、日本美術院の「再興」に要した資金の獲得であった。大正3年(1914)9月の美術院再興に際しては、大観・観山の名義による約1万円の借金を元手に、下谷区谷中新しい研究所が建設されるのであるが、『日本美術院史』にはその前後について以下のように述べられている(傍線は稿者)。



図20・21 20世堆朱楊成《野遊之図料紙文庫》(左)《野遊之図硯笥》(右) 大正3年
敦井美術館(新潟市)蔵 [出典:楊成会編『堆朱作品図録』楊成会、昭和4年]

およそ事を企つるものは、まずそれに要する資金調達の道を講ずることをもって順序とし定石とする。(中略)さりとして当時の大観や観山には、自らこれに処する金を懐にしていた訳ではない。(中略)負債によって得たる金をもってまず建築の資材を購入し、大正三年四月工事に着手し、その翌五月にははやくも上棟に運んだ。瓦葺二階建畳敷百二十余坪の純日本式建物を本館とし、これに連続して二十坪程の旧建物に若干の増建しをした別棟と、十余坪の管理人住宅とである。それをもって全構とする。(中略)

美術院の再興は、まずこれだけの機構を調べてその工事を進め、一切のものの成を告ぐるにおよんで、はじめて資金調達についての途を策した。すなわち一口金五百円供出の賛助員を募り、それによって得た金をもって負債償却の料となし、院はまた賛助員にたいし、酬ゆるに、一口ごとに、大観・観山・武山・紫紅の新作画尺八条本おのの一点および未醒の洋画一点、計五点をもってすることとした。そして賛助員としては、原富太郎・渋沢栄一・高田早苗・石渡敏一・増田義一・内貫清兵衛等五十二人をえた。美術院からこれら賛助員に贈るべき絵は、抽籤をもってその順序を定め、大正三年九月に、第一回の贈遺を始め、中途、紫紅が病歿したので、この分だけが果しえなかったのみで、他は全部その義務を履行し、大正七年十二月に至ってこれを終了した。⁴⁰

『日本美術院百年史』4巻には、大正3年9月の日付がある「日本美術院賛助員贈呈絵画分配表」が掲載されており、そこに名前のある下記49名が日本美術院再興のために資金援助を行った「賛助員」の全容であったと考えられる⁴¹。このうち、原富太郎(三溪)は一人で4口(2,000円)供出しているため、のべ52口ということになる。また、ここには明治44年(1911)に結成された観山の後援組織「観山会」の会員も多数含まれている⁴²。なお、新潟県出身・ゆかりと思われる人物には傍線を付した。

40 『日本美術院再興 在野集団として文展対抗』齋藤隆三『日本美術院史』前掲註(5)195～197頁。

41 日本美術院百年史編集室編『日本美術院百年史』4巻、財団法人日本美術院、平成6年、976～977頁。なお、齋藤隆三『日本美術院史』巻末の年表(417頁)では再興時の賛助員として高田早苗と原富太郎の2名しか挙げておらず、『日本美術院百年史』4巻の「構成員の異動」の項(989頁)も同じ記載となっている。公益財団法人日本美術院webサイトの「沿革 創立時・再興時の構成」(https://nihonbijutsuin.or.jp/his_kousei.php、令和5年12月1日閲覧)では、分配表の全49名を再興時の「賛助員」として記載している。

42 下村英時『下村観山伝』(前掲註(10)152～154頁)の記述によれば、観山会は渋沢栄一、高田早苗ら観山作品愛好者が組織した後援会で、明治44年(1911)日本橋倶楽部で発会式を挙げ、次第に会員数を増やした。当初の会員は渋沢栄一、増田義一、山中隣之助、本多静六、尾高幸五郎、渋沢篤二、前島密、日比谷平左衛門、鈴木純一郎、松本金太郎、田中唯一郎、市島謙吉、高田早苗、諸井恒平、黒須広吉。後日、補充会員として入会した者は池田竜一、前島弥、井上辰九郎、諸井四郎、野口弘毅、木村徳衛。

原富太郎	辰沢延次郎	藤村喜七	中村利器太郎	朝吹常吉	笠原健一
男爵 洪沢栄一	洪沢篤二	日比谷平左衛門	山中隣之助	諸井恒平	尾高幸五郎
高田早苗	増田義一	阿部房次郎	芝嘉久太	吉田忠三郎	内貴清兵衛
飯田新七	原保太郎	井口庄蔵	渡辺六松	川上佐太郎	小畔亀太郎
関秀次郎	中沢彦吉	秋元平八	小西平兵衛	塩田角治	石渡敏一
木村徳兵衛	市原求	大村五左衛門	本多静六	日下吉平	池田竜一
市島謙吉	田中唯一郎	前島弥	黒須博吉	和田直兵衛	泉吉次郎
近山与五郎	木村徳衛	芳賀吉之助	白川朋吉	橋本太吉	前田米蔵
相原寛太郎					

参考までに紹介しておけば、明治31年(1898)の日本美術院創立時の「名誉賛助会員」および「特別賛助会員」にも、新潟県関連人物の名が散見された。「名誉賛助会員」に高田早苗(安政7～昭和13、東京出身の政治家・教育者、上越出身の前島密の娘婿)、市島謙吉(安政7～昭和19、阿賀野出身のジャーナリスト・政治家)、大倉喜八郎(天保8～昭和3、新発田出身の実業家)、千頭清臣(安政3～大正5、高知出身の官僚・政治家、新潟県知事を務める)の4名、「特別賛助会員」に大橋乙羽(明治2～明治34、山形出身の編集者、博文館創業者で長岡出身の大橋佐平の娘婿)の名前がある⁴³。名誉賛助会員のうち、高田・市島・千頭の3名は、岡倉天心の東京開成学校・東京大学での同窓生であった。

そして、先掲の日本美術院再興時の「賛助員」には、創立時にも増して、本県関連人物が多く比重を占めた。高田早苗と市島謙吉の2名が引き続き名を連ねており、この両者に、日比谷平左衛門(弘化5～大正10、三条出身の紡績実業家)、増田義一(明治2～昭和24、上越出身の政治家、実業之日本社を創立)、前島弥(明治6～昭和10、実業家、前島密長男)、木村徳衛(明治4～昭和21、小千谷出身の医師)を加えた6名は、いずれも先述の「観山会」の会員であった。なお、同会会員に新潟県人が多い理由については未詳である。また、中村利器太郎(明治5～昭和15)は父が新潟県人で、三越の経営者となった人物である。

さらに、ここで注目しておきたいのは、太字で示す長岡の実業家、井口庄蔵・渡辺六松・川上佐太郎・小畔亀太郎の名前が一続きに並んでいる事実である。繰り返すが、この4名はいずれも観山作品の所蔵者であった。つまり、新潟県人が多数含まれる「観山会」、そして、観山の明治42年の新潟旅行をきっかけに人脈形成が図られたと考えられる長岡の実業家、という観山の2つの支持基盤が、日本美術院の再興に少なからず貢献した、ということになるのではないだろうか。

さて、長岡を中心とする県内実業家たちによる美術品収集熱は、その後どうなったのだろうか。明治末年には東山油田の産油量が減少し、宝田石油会社の経営刷新が求められた。大正3年(1914)、第一次世界大戦開戦による好景気で鉄工業が成長するが、終戦とともに停滞を迎える。また、大正10年(1921)には宝田石油が日本石油株式会社と合併して長岡を去ることになった。こうした「オイルシティーからの脱却」⁴⁴という長岡市周辺の産業構造の変化、またこれらの産業に携わった実業家たちの世代交代についても考慮に入れておく必要があるだろう。

そして昭和期に入ると、各収集家の死去とコレクションの散逸が相次いで起こっている。先代の死去に伴い、各家が次々に所蔵品を手放した状況を、多数の売立目録から確認することができる。

まず、渡辺六松は昭和4年(1929)に没しており、彼の所蔵品は、①『長岡市渡辺家所蔵品入札』(東京美術倶楽部、昭和6年12月7日)、②『渡辺家所蔵品入札目録』(長岡市常盤楼、昭和8年9月25日)の少なくとも2度にわたり売り立てられた。このほか、昭和9年10月15日、昭和11年6月15・16日、昭和11年12月8日にも、長岡市常盤楼において「渡辺家」の売立がなされており、六松の旧蔵品が取り扱われた可能性がある⁴⁵。①には下村観山《美人と舍利之図(美人と舍利)》(入札目録での表記は《美人舍利》)が図版掲載されている。

43 「日本美術院創立時の構成員」日本美術院百年史編纂室編『日本美術院百年史』2巻下〔資料編〕、財団法人日本美術院、平成2年、63～64頁。

44 「第3節 オイルシティーからの脱却(大正時代)」100周年誌執筆企画委員会編『長岡商工人 百年の軌跡—不死鳥のまちを支えた商工人名録—』長岡商工会議所、平成23年、73頁。

45 『渡辺家所蔵品入札目録』長岡市常盤楼、昭和9年10月15日。『市内渡辺家加茂町石田家所蔵品売立目録』長岡市常盤楼、昭和11年6月15・16日。『市内渡辺家某家所蔵品売立目録』長岡市常盤楼、昭和11年12月8日。

この作品は昭和6年(1931)2~3月開催の「故下村観山遺作展覧会」、9月発行の『観山遺作集 乾・坤』では六松の長男・清次郎の名義となっており、彼が同年中に父・六松の遺品を手放したことになる。《美人舍利》は、2年後の『当市某家蔵品入札』(東京美術倶楽部、昭和8年12月29日)にも掲載され、当市、つまり東京市の某家所蔵品として再び売り立てられたことが辿れる。一方②には、《普賢文殊》(入札目録での表記は《金地着色普賢文殊双幅》、前掲[図7])が図版掲載され、この売立(昭和8年9月25日)の際に高鳥博の手に渡ったのではなかろうか。

次に、石田友吉の所蔵品を見る。彼は昭和5年(1930)に没しており、その年のうちに①『新潟県加茂町石田家蔵品入札』(東京美術倶楽部、昭和5年12月8日)が開催された。6年後の②『市内渡辺家加茂町石田家所蔵品売立目録』(長岡市常盤楼、昭和11年6月15・16日)も、おそらく友吉の遺品を扱ったものであろう。①には《三聖之図》(入札目録の表記は《三聖人》)が図版掲載され、さらに2年後の『当市某家所蔵品入札』(東京美術倶楽部、昭和7年7月11日)にも同作品(ここでの表記は《三聖》)が掲載された。

最後に井口庄蔵について述べる。彼は昭和7年(1932)に没し、その所蔵品については①『市内井口家所蔵品売立目録』(長岡市常盤楼、昭和14年4月17日)、②『長岡市井口家所蔵品入札』(東京美術倶楽部、昭和14年5月22日)[図22]の2冊が確認できる。②は表紙が木版摺で、カラー図版を多



図22 『長岡市井口家所蔵品入札』(東京美術倶楽部、昭和14年5月22日)表紙

数掲載した豪華版であり、計210点が収録されている。その内容を下表に示すが、前掲の『観山画集』、『故下村観山遺作展覧会陳列品目録』、『観山遺作集 乾・坤』に掲載済の作品は太字で記した。

下村観山 (カラー図版)	《釈迦十六羅漢》(双幅) [遺作展目録] 《春秋花鳥》(双幅) 《寿星楼閣》(三幅対) 《残雪》 [観山画集] 《竹の子》 《孔雀》(二枚折屏風一雙) [遺作展目録・遺作集] 《寿星》(六枚折屏風一雙) [遺作展目録]		
下村観山 (モノクロ図版)	《隠士》 《蓬萊》(双幅) 《雨中鷺》 [遺作展目録] 《悟覚》 《雨やみ》 《達磨》 《朧月鶴》 《木枯》 《寒山拾得》 《紅葉》 《釈迦》 《蜆子》 《田うない》 《観音》 《潜鳥》 《虎溪三笑》 《男姿》 《西瓜蛭》 [観山画集の衝立《ほたる》を軸装にしたもの] 《沢潟》 《桐道》 《雪の松》 《月下竹》 《十牛帖》(十幀) [観山画集・遺作展目録] 《老松小禽額》 《雨後曳舟風呂先》		
その他の作品 (カラー図版のみ抜粋)	菱田春草 《春夏秋冬花鳥》(三幅対) 橋本雅邦 《山居月》 安田靉彦 《牡丹》 川端龍子 《金鱗》 《保全交趾白旦大亀香合》	横山大観 《宇治》 今村紫紅 《日蓮辻説法》 横山大観 《蓬萊山》 横山大観 《放鶴》(六枚折屏風一雙) 《古九谷色絵見込獅子絵大鉢》	速水御舟 《常夏》 小林古径 《春趣》(額) 横山大観 《石山寺》

こうしてみると、井口は画集・遺作展目録等に掲載される以外にも多数の観山作品を所蔵しており、また、前掲の山田武雄の文章に述べられた、その他の日本美術院の画家との幅広い交流についても、彼の所蔵品から裏付けられるのではなかろうか。

以上から、明治期に隆盛を誇った県内実業家たちの収集品は、その多くが昭和戦前期に散逸してしまい、今日地元には殆ど残されていない状況と考えられる。それだけに、かつて渡辺六松が蔵した《普賢文殊》が高鳥博の手を経て、結果的に長岡に残されたのは、実に幸運なことであった。

まとめ

明治期の新潟県では油田開発その他の近代産業が勃興し、経済的活況を呈したが、このことにより中央画壇の美術家が多数来県し、彼らの作品が県内にもたらされた。下村観山・木村武山による明治42年(1909)の来県もその一例であり、日本美術院の五浦移転後、同地に取り残された彼らが活路を求めて選んだ旅先の一つが新潟県であった。とりわけ長岡には美術品収集を趣味とする実業家が多く、旅の主な目的は彼等を訪ねて支援を求め、作品を受注することだったと推察される。観山らは新潟旅行中の多くの期間を長岡の井口庄蔵邸で過ごしたとみられ、そこを拠点に県内の催しにも出席した。彼らの来訪は県内有力者の美術品収集熱を大いに刺激し、滞在中に制作された代表作《小倉山》は井口庄蔵によって愛蔵され、来県前後に描かれた《普賢文殊》は、井口と公私両面で繋がりのあった渡辺六松が所蔵した。また、観山の来訪が契機となり、井口庄蔵・渡辺六松らの周辺の実業家によって「楊成会」が組織され、観山が築いた本県財界人脈が後の日本美術院再興にも少なからず貢献した。

昭和初期、かつて観山とかかわりのあった収集家たち(主として幕末・維新时期生まれ)が相次いで亡くなると、観山作品を含む彼らの収集品は散逸していった。明治42年(1909)の観山来県からちょうど20年後となる昭和4年(1929)には、彼らの中で最年長であった渡辺六松が没し、翌5年(1930)には観山も死去した。《普賢文殊》は昭和6年(1931)の「故下村観山遺作展覧会」に出品されたが、その後、六松長男の清次郎が手放し、昭和8年(1933)長岡市における売立会で高鳥博の手に渡ったと考えられる。ほぼ同時期の顕著な動向としては、井口庄蔵の次男吟次郎や駒形十吉らによる長岡青年美術愛好会「風羅会」の結成⁴⁶が知られるが、高鳥は明治20年代、風羅会会員の面々は明治30年代の生まれであった。観山らの来県によって形成されたコレクションの多くは、この時期に四散してしまい、現在では見る影もないが、県内実業家による美術品収集の趣味は後の世代にまで脈々と受け継がれ、戦後期の県内における相次ぐ私立美術館の設立へと繋がっていくのである。

本稿は、令和5年(2023)1月14日、新潟市芸術創造村・国際青少年センター(ゆいぽーと)で開催された二葉アーツスクール2022 めだかの学校(Season5)第5回「日本画家・下村観山と新潟」の発表原稿をもとに加筆修正をおこなったものである。

本稿執筆にあたっては、以下の方々にお力添えを賜りました。記して感謝申し上げます。石垣雅美氏(にいがた文化の記憶館)、猪本爾六氏、小川弘幸氏(新潟市芸術創造村・国際青少年センター)、柏木智雄氏(横浜美術館)、佐山富榮氏、田中洋史氏(長岡市歴史文書館)、古田亮氏(東京藝術大学大学美術館)、本井晴信氏、山浦健夫氏、山本善一郎氏、横山秀樹氏、神奈川県立図書館、加茂市教育委員会、敦井美術館(新潟市)、東京文化財研究所、豊田市美術館、横浜美術館(五十音順)。

⁴⁶ 風羅会については以下の文献がある。松木岳二・松木祥三・鞍立道子編「九官鳥 松木喜之七遺稿集」昭和25年。新潟県史研究会編「新潟県百年史 下巻」野島出版、昭和44年。笠輪勝太郎「風羅会のことその他」『Penac』2号、長岡ペンクラブ、昭和52年。金山淳二編「三角岩」松木喜之七酒井由郎顕彰会、昭和53年。田中日佐夫「美術品移動史—近代日本のコレクターたち—」日本経済新聞社、昭和56年。100周年誌執筆企画委員会編「長岡商工人 百年の軌跡—不死鳥のまちを支えた商工人名録—」長岡商工会議所、平成23年。猪本爾六「特集 戦前の地元パトロン文化のダイナミズムを追って 長岡青年美術愛好会“風羅会”」『マイ・スキップ』216号、平成31年1月。山浦健夫「高村光太郎と長岡、悠久山」『新潟協だより』53号、新潟県測量設計業協会、令和2年。和田明子「芸術を愛し、育てた文化人 駒形十吉」『新潟日報おとなプラス』令和3年9月6日付。星野浩二「高村光太郎絶讃の悠久山の一本樺と風羅会と松木喜之七のことなど」『Penac』47号、長岡ペンクラブ、令和4年。